

どんびり

16 non-biri
2016 Spring



表紙の
撮影場所

秋田県庁



のんびり まつすぐ 秋田のくらし

今号の特集テーマは「ローカルメディア」。これにちなんで、表紙では、秋田を全国に発信してきた『のんびり』そのものを表現します。

撮影場所の秋田県庁に出現したのは、秋田公立美術大生が作った、大きな大きな『のんびり』の冊子！その開いたページから、寒天、池田修三、マタギ、日本酒、石川理紀之助^{りきのすけ}、秋田内陸線、秋田弁、道の駅、成田為三、劇団わらび座……これまでの特集で出会った『のんびりオールスターズ』が飛び出します。それぞれ位置に着くと、芸達者なみなさんの本領発揮！巨大な本から本当に飛び出しているかのような、迫真の演技を見せてくれます。さらに、その奥でバックナンバーを掲げるのは、4年間、一緒に『のんびり』を作ってきた秋田県職員のみなさん！そして最後に、センターを飾るべく登場したのが、佐竹敬久^{のりひさ}秋田県知事！この型破りなシチュエーションにも動じず、軽快にポーズを決めてくれます。そんな、知事のノリノリの姿に、現場は一気に盛り上がり、最高の一枚を撮ることができました！この、『のんびり』の4年間の集大成ともいえる表紙撮影の様子は『のんびり公式ウェブサイト』でもご覧いただけます！

『のんびり』表紙写真ができるまで。写真家浅田政志と奮闘したその過程を公開中！

<http://non-biri.net>



のんびりしたいは
みんなのきもち
のんびりできるは
ゆたかなあかし
のんびりまつすぐ
秋田のくらし

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。
その豊かさが
秋田の実直なもののづくりを支えてきました。
そして同時に、秋田の人々のなかには
大らかで力強い
「のんびり」精神が育まれました。
そんなのんびり秋田は
右肩上がりの経済成長という
ゴールなきゴールに向かい
懸命に走ってきたニッポンにとって
まるでピリを走るランナーのように
映っていたかもしれません。
けれど世の中は変わりました。
順位など気にせずのんびり歩いてきたことが
まさに「ノンビリ」となる時代がやってきました。
日本人の多くは今、
うまい飯が食べられてうまい酒が飲めるという
当たり前の豊かさについて考え直しています。
しかし秋田では昔も今も、ずっと
それが人々の暮らしの真ん中にありました。
ピリだ一番だ。上だ下だ。と
相対的な価値にまどわされることなく
自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。
そんなニッポンのあたらしい「ふつう」を
秋田から提案してみようと思います。



16

non-biri
2016 Spring Issue

今号の「あきたびじん」ぶつ 相関図



ABS 秋田放送
テレビディレクター
石川岳さん



ABS 秋田放送
ラジオディレクター
渡邊洋祐さん



秋田県あきたびじん
アドバイザー
梅原真さん



秋田県知事
佐竹敬久さん



無明舎出版 舎主
あんばいこうさん



『週刊たいまつ』
むのたけじさん



県外メンバー



藤本智士



浅田政志



鍵岡龍門



山口はるか



服部和恵



矢吹史子



田宮慎



船橋陽馬



澁谷和之



今井春佳



青谷明日香

のんびり 編集チーム

秋田メンバー

62

non-biri akita access map

56

ハタハタ
きたど〜！

51

下戸式秋たんぼう 福田利之
第16回／最後のしめは日本酒で

46

ちようどいかんてん
第4回／堀部美奈子さんと冬の秋田

38

最終章 自らがたいまつとなって

32

第5章 地方出版社という生き方

26

第4章 のんびりイズムを発信する

20

第3章 それぞれの、あきたびじん

14

第2章 秋田の放送局だからできること

6

第1章 ローカルメディアってなんだ？

4

特集 田舎の教養
決して消えない
ローカルメディアの灯。

1

のんびりまちずく秋田の暮らし

目次

特集

田舎の 教養

決して消えない

ローカル
メディアの灯。

取材・文＝藤本智士

Text＝Satoshi Fujimoto

写真＝浅田政志／鍵岡龍門／船橋陽馬

Photo＝Masashi Asada / Ryumon Kageoka / Yoma Funabashi

丸4年間、本誌を含めて計16号も発行してきた『のんびり』。いまや年度末発行号のお約束となってしまう感もありますが、県の発行物である以上、次年度も『のんびり』が続くかどうか、まだわかりません。しかしながら、いま原稿を書いている時点で僕はもうそろそろ『のんびり』は次の段階へと進まなきゃいけないんじゃないか？　なんてことを考えています。

「ローカルメディア」なる言葉が目立ちはじめたここ数年、おそらくその一つに挙げられるであろう本誌は、秋田という「高質な田舎」の魅力を伝えるPR媒体であると同時に、秋田県が抱えるさまざまな課題をいまこそ長期的な視点をもつて解決していかなばならないという強い意志を伝えるべく、県庁職員のみならずと一丸となって編集発行に取り組んできました。目先の数字でごまかされるような短いスパンの成果に右往左往するのではなく、目の前の課題に対して、本誌タイトルのごとくもっと「のんびり」構えて見つめれば、それがさして大きな問題ではないことに気付くことができま

す。またその一方で、知らぬ間に進む病魔のごとし、悠長にしていけない本質的な問題に気付くこともあります。

県の発行物であるこのオフィシャルな媒体が、どうしてそのようなアプローチのもと、ここまでやってこれたのか。それは、従来のお役所的な平等性からいかに抜け出していくか？　そんな課題を共有し、ともにニッポンの未来を作ろうと県庁のみなさんが奮闘してくれたことがなによりですが、それと同時に、ここ秋田では、力強い地域メディアの火がいまもなお消えることなく灯され続けているという、その土壌のおかげなのだと感じています。本誌そのものの成り立ちと、本誌の背景にある、圧倒的な知の地層の一部を明らかにしていくことで、地方から発信していくことの未来を想像できれば、というのが今回の特集です。

とはいえ、いつもどおりの「のんびり」取材旅。まずは今号もゆったりお付き合いいただければと思います。

藤本智士（のんびり編集長）



ローカル
メディア
ってなんだ？

1月12日(火)

取材初日の朝、兵庫や東京など各地からやってきた県外チームと、秋田メンバーがのんびり事務所集合。毎冬の取材に参加してくれているミュージシャンの青谷明日香ちゃんも無事到着し、まずは今回の特集意図についてあらためてみんなに説明をします。

いまや全国各地でさまざまな地方PR誌が作られるなか、最初は賛否両論あったであろう『のんびり』も、おかげさまで4年も続けるうちにその本意を理解してくださるかたが増え、さまざまな局面で好意的に語っていただくようになりました。全国各地で講演やワークショップなどをした際には、「自分たちも『のんびり』のようなものを作りたい」と切実に訴える役所のかたや、『のんびり』を参考に作り出した」と実際に雑誌をくれる若者に出会うこともあり、またなにより、毎号毎号、想像を超える数の反応をいただくことに、僕たちは励まされてきました。

こういった反響のすべてを自分たちの成果としてエネルギーに転換してきたことはもちろんなのですが、しかしそれは序文で掲げたとおり、あくまで



も脈々と秋田の人々の教養を培ってきた地元メディアの人たちの功績の上に成り立っているわけで、つまり僕は、前述の手前味噌な自慢話の裏側に、極端に言うならば、人のふんどしで相撲を取っているような、気まずさに似た気持ちを抱えていました。

取材スケジュール

ここで秋田編集チーフのヤブちゃんが現状を報告してくれます。相交わらず特集取材の日程は全員が秋田入りする4日間のみ。明後日には表紙撮影もあるゆえ、正味3日間どこまでやりきれるか。みんなの表情は真剣です。現在すでに約束が取れているのは、表紙撮影にも参加していただくことにな



っている秋田県の佐竹知事と、秋田県のあきたびじょんアドバイザーであるデザイナーの梅原真さん。そして無明舎出版の代表あんばいこうさん。無明舎出版については先述のとおりですが、知事と梅原さんにおいては少し手前味噌な感じを受けるかもしれません。しかし、秋田に脈々と続く地域メディアの土壌を明らかにする前に、そもそもこのお二人は内側から『のんびり』をどのように見ていたのか？ そのことを知ることはローカルメディアの存在意義を知ることにもつぎ繋がるはず。という僕なりの確信がありました。



さらにヤブちゃんにお願いしていたのが、秋田県六郷町（現美郷町）出身、現在は埼玉県にお住まいという、101歳のジャーナリスト、むのたけじさんへの取材でした。終戦を機に朝日新聞の記者を辞めたむのさんは、秋田に戻って30年もの間、『週刊たいまつ』なる新聞を発行しておられました。しかしさすがに今回の取材日程で埼玉に伺うのは難しく、調整は厳しいとのこと。ならばせめて『週刊たいまつ』を見るだけでもと、その現物を所蔵する横手市立横手図書館に問い合わせてもらったのですが、現在『週刊たいまつ』のデジタル化を進めている最中で、現物すべてが業者さんのもとにあり、ちょうどいまは見るできないということです。なんと残念なタイミングですが、そうとわかれれば何か別の方法で探すしかありません。

と、ここまで共有したところで、のんびりチームにはなかなば寝耳に水な今日のスケジュールが告げられます。それは、この後13時15分から10分間、ABS秋田放送の「ごくじょうラジオ」というラジオ番組に生出演することでした。



ラジオの現場

ローカルメディアと言われるとき、僕たちはつい紙媒体を中心に考えてしまふのですが、ラジオやテレビなどの放送メディアもその一つのはずです。そんなときに思い出したのが、ABS秋田放送のラジオディレクター、渡邊洋祐、通称なべちゃんでした。のんびり秋田メンバーとも仲の良い彼は、これまで『のんびり』主催イベントの告知など惜しみない協力をしてくれているのですが、なにより彼はラジオというメディアを心から愛していて、そんな彼にまっすぐラジオの話を聞いてみたいと、今夜、約束を取り付けていました。ならばその前にまず、なべちゃんの仕事ぶりをみんなで体感しようと、彼が担当するラジオ番組に、のんびりチーム全員で出演したいと少し無茶なお願いをしていたのです。ということで早速スタジオへと移動。なべちゃんやパーソナリティーのお二人にご挨拶をして、生出演がスタートします。

公開収録用の小さなスタジオに、のんびりチーム総勢11名がいる光景は、なかなか異様。『のんびり』の説明か

ら、今回の特集内容、さらにはこの出演自体が取材の一つであることを伝え、あつという間に出演時間は終了。しかし、たった10分の出演の間にも『のんびり大好きです』とリスナーさんから応援FAXが送られてくるなど、ラジオの浸透力と反応の速さを実感します。そして僕たちはそのままテレビ局へと向かいます。といっても、こちらは出演ではありません。

ガクさん

秋田県の魅力を県外のみなさんに伝えるという目的をもった『のんびり』は、県外配布が多いゆえ、秋田県内ではあまり知る人がいなかったのですが、一転、秋田のかたにも広く認知されはじめたきっかけの一つに、池田修三という、いまは亡き木版画家の存在があります。さまざまな企業ノベルティなどに起用され、秋田の人たちにとっては馴染み深かったものの、全国的な知名度は低かった池田修三さんについて特集を組んだところ、全国各地から想像以上の反響をいただきました。それをきっかけに作品集の出版も決まり、いよいよこれは、秋田市内で大きな展覧会を開催し、あらためてわが町の宝物に気付いてもらわねばと考えた僕は、どうにか池田修三さんについてのドキ



す。以前、2008年放映のドキュメント「そこに山ありて」名峰・鳥海山神祕の自然」というガクさん出雲くんコンビの番組を見せてもらったのですが、2年間、計200時間以上の時間を鳥海山の撮影に費やしたというその映像は圧倒的で、画面をとおしてなお伝わってくる厳しくも美しい自然の姿に、失礼ながら地方局にもこんな映像を撮れる人がいるんだと、心底驚きました。



ユメンタリー番組を作れないだろうかと考えました。そこで、ABS秋田放送出身で、現在は東京でフリーアナウンサーとして活躍する友だちの伊藤綾子ちゃんに相談したところ、「この人ならなんとかしてくるはず!」と真っ先に紹介してくれたのが、いまから僕たちがお会いすることになっている、ABS秋田放送テレビディレクターのガクさんこと、石川岳さんでした。

2014年の春、単身ABSにお邪魔した僕は、なんとか初対面のガクさんの胸に届きますようにと必死になって『のんびり』や池田修三さんについて話をしました。じっと耳を傾けてくれるガクさんの前に、まっすぐ思いをぶつけた僕は、あとは『のんびり』や作品集を読んでもらってどう感じてくれるかにかけるしかない。そう思っていたのですが、話し終わるやガクさんは「これは絶対番組にしなきゃいけない



いですね。企画書書いてみます」と力強く即答してくれました。なんとガクさん、電話でアポをとってからお会いするまでのたった2日ほどの間に、すでに作品集を購入して読んでくれたのです。そうして無事放映された番組のおかげで、秋田県立美術館での池田修三展には1万2千人の人が訪れてくれました。また、そのことをきっかけにして、なにやら『のんびり』という雑誌の特集が発端らしいと、県内のみなさんにも僕たちの存在を認識してもらえるようになったのです。ゆえにガクさんは、秋田における池田修三さんのブレイクと、『のんびり』の周知を裏で支えてくれた、とても大切な人なりました。

いずも 出雲くん

そんなガクさんがいま、ちょうど制作中の番組のナレーション収録をしているとのこと、その現場を見せてくれることになっていました。ABS秋田放送に到着すると、ガクさんではなく、同じくABS秋田放送の出雲輝彦くんが待っていてくれました。



テレビの現場

ナレーションリハーサル中のガクさんに代わり、まるで普段からそういうサービスをしているのかと思うほどのナチュラルさで局内を案内してくれる出雲くん。撮影した映像をどうやって編集するかを古い機材と新しい機材、両方で実践してくれながら、編集機器の進歩がもたらす現場の変化について語

ってくれます。「キー局（系列の中心となる東京の放送局）だとラーメンに湯気を足したりすることもあるんですけど、僕はあれはやらない。意地でも湯気は撮る!」なんて出雲くんの言葉に、紙であろうと映像であろうと、僕たちと思いは一緒なんだと実感するのんびりチーム。その後も各所を見学させてもらいつつ、いよいよガクさんの待つナレーション収録現場へ。



高校野球史に残る名勝負として語り継がれる、1984年（昭和59年）第66回全国高校野球選手権大会準決勝当時、桑田、清原を擁するPL学園が破竹の勢いで勝ち進むなか、そこに立ち上がったのは、それまでまったく無名だった秋田県あきたの金足農業高校でした。強豪PL学園をギリギリまで追いつめた、略称、「金農」に秋田県人がおおいに湧いた、かつての興奮から30年。桑田投手と競り合った水沢投手をはじめ、高校球児たちのいまを追う、ガクさん渾身のドキュメントでした。偶然にもそのナレーションを担当していたのが、前号で大特集を組ませてもらった劇団わらび座の碓井涼子さんだったこともあり、目の前で命が吹き込まれていくその番組に、僕たちはほとんど惹き込まれていきました。



そんな僕たちを見て、出雲くんがガラスの向こうで作業を進めるガクさんのことについて語ってくれました。「僕はカメラマンだから、人によっては、なんでお前に言われたとおりに撮らなきゃいけないだよって思うときも正直あるんですけど、あの人に限ってはまったくいいですね。テレビ作りたいためじゃなくて、その先のものを目的にしてやってくれるから。それにカメラマンのことちゃんと知ってるんで。こう言えば撮りやすくなるんだろうとか、こう言えば撮るだろうとか。だから僕はあの人のもとで全然まだ勉強中です。身内だからあんまり言っても気持ち悪いですけど（笑）。そもそも僕は秋田じゃないと絶対テレビ局やりたくないと思うんですけど、自分にと

って近所のおじさんだったような人をヒーローとして取材できるこの仕事は、すごい良いなあって思うんです。そこが中央局とは違うローカルの良さだあって。秋田弁で言うところ「家の裏のじいさんどごヒーローにできる」っていうのは、すごい商売だあって。そんな言葉に、僕たちはあらためてこのお二人との出会いが『のんびり』にとって必然だったと感じていました。

秋田県立図書館へ

実はガクさんには今夜、ラジオのなべちゃんと一緒にお話を伺う約束もらっていることもあり、あまりお邪魔にならないよう、早々にABSを退散します。せっかくなのですぐ近くにある秋田県立図書館に行っ、秋田の地元メディアについて調べてみることに。そこで驚いたのが、地域新聞の数でした。県内では、五大紙とよばれる全国紙よりも圧倒的なシェアを誇る秋田魁新報はもちろん、もっと細かな地域に特化したローカル新聞が秋田にはたくさん。ここ県立図書館閲覧室にあるものだけでもなんと14種類も。それらすべてがいまなお発行を続けていることに驚きます。そしてさらに予想外だったのが、このコーナーでした。



「本を出版するということ 地方出版・自費出版・同人誌等」と書かれた特設コーナーが、まるで僕たちの取材に合わせたかのように展開されていました。そこには、むのたけじさんの『週刊たいまつ』の一部をまとめた書籍や、明日、時間をいただくことになっている無明舎出版の最初の出版物『中島のおちや』など、貴重な本が数々並べられていました。あらためて図書館という場所の意義を感じながら、僕たちはそのうちのいくつかを借りて帰ることにしました。



秋田の放送局だから

できごと



ガクさんとなべちゃん

ちょっとした思いつきで向かった図書館ですが、思わぬ収穫を得た僕たちは、今日一日お世話になった、ABS秋田放送のなべちゃんとガクさんに再びお会いするべく、のんびりチームお馴染みのお店「京や」へと移動します。秋田の放送メディアに携わるお二人のインタビューは、地方から発信していくことの使命に溢れていて、それはもはやそれぞれの業界の話ではないのだと、強く感じることができました。ぜひ読んでみてください。

藤本 今日はありがとうございます。ナレーション録りの現場、ほんと刺激的でした。

石川さん（以下敬称略） いまは基本的にディレクターが一人で編集しちゃうんでつまらないんですね。前はカメランと二人で喧々諤々、編集して



石川岳さん

ABS秋田放送
テレビディレクター

ガクさん 47歳

渡邊洋祐さん

ABS秋田放送
ラジオディレクター

なべちゃん 38歳

たんですけど。パソコンの弊害というか、自分でできちゃうから。

藤本 ガクさんはこの仕事をして何年になるんですか？

石川 25年経ちました。卒業してそのまま秋田に戻って22歳でABSに入って、30歳まで報道で、その後8年間制作にいて、そこからまた4年間報道で、3年前に制作に戻ったんです。

一同 へえ〜。

藤本 なべちゃんはABSに入ってから何年になるの？

渡邊さん（以下敬称略） 15〜16年ですね。技術で入って。

藤本 じゃあガクさんは10年先輩になるんだ。ABSに入ったのは、地元で働いていた意識が大きかったんですか？

石川 大学で大阪に行ったくらいから、秋田で働く、戻って来るんだって地元の企業を探していて、就職活動も地元の企業しかしてないんですよ。

矢吹 なべちゃんは秋田出身じゃないんだよね。

渡邊 山形です。鶴岡。

藤本 そうか。なべちゃんはなんでABSに？

渡邊 僕は放送局受験をしていて、技術で受かったのがABSで。父親がYBC、山形放送っていう、同じ日テレビの局で働いてて。

石川 そうなの!?

渡邊 兄も放送関係の仕事をしていて、僕もちっちゃい頃からやりたいなと思っていて。大学のときも放送局でバイトしてました。

一同 へえ〜。

渡邊 大学は岩手だったので、IBC（岩手放送）で。

藤本 まっすぐだね。お父さんは具体的にどういう仕事をしてるの？

渡邊 うちの親父は、もともとは東京の大学行ってメーカーに勤めてたんですけど、うちのおじいちゃんに、地元に戻って来るように、当時できたばかりの放送局に勝手に入れられて（笑）。技術をやっていたんですけど、最終的には制作を。いろんな部署を経て。同じような道を歩いてます。

矢吹 お兄さんも自分もってなると、やっぱりお父さんの影響が強かったのかな。

渡邊 あと叔父さんっていうのもあるんですけど（笑）。叔父さんが食べられないときに親父に世話になって、東京のプロダクション（番組制作会社）を紹介してもらって、その後、うちの兄貴が高校を3日で辞めてしまっってフラフラしてるときに、叔父さんがプロダクションをはじめたので「じゃあ、うちに来い」と兄貴はそこに。今年もお正月に、叔父さんの番組がいくつか



流れてたらしいです。

一同 へえ〜。

渡邊 ガクさんとかやって……。

藤本 ないよね。

石川 中継と一緒に。

渡邊 ガクさんがディレクターで僕がカメラマンみたいな時代は何回か。

矢吹 へえ〜。

石川 中継車とか、電波系って技術職の仕事なんですよ。

矢吹 でも本来やりたいのは違った。

渡邊 ラジオ。

藤本 技術で入るって、ふつうはずっと技術なんじゃないの？

渡邊 そうですね。

藤本 それは自分がいまの仕事求めたからチェンジできたの？

渡邊 そうです。希望を出して。8年くらい通ってませんでしたけど（笑）。

田宮 営業のときも知ってるけど、すごい暗かった。

一同（笑）。

藤本 じゃあ、とにかく局に入るために技術だったらいけるかもって。

渡邊 実はそうなんです。資料請求をしたときに、今年はアナウンサーと技術しか募集しませんでしたって書いてたんで、アナウンサー無理だし技術だと思って受けたら、幸い入れて。でも入社式の日、よく見たら一般職の人

矢吹 いるじゃん！ って。

藤本 本当は東京の放送局に入れるものなら入りたかったっていうのはあったの？

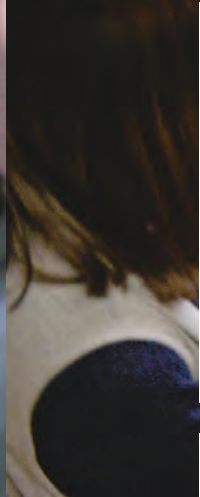
渡邊 ありましたね。ただ、あんまりその違いを大学生の時点で大きく感じてはなかったです。ただ大きい方がいいだろうってくらいで……ガクさんって大学のときは関西弁だったんですか？

石川 いや、秋田弁。

青谷 かつこいいう。

藤本 ガクさんってすごい頑固そうじゃない。ネガティブな意味じゃなくて。

矢吹 着地点への向かい方が。



藤本 そう。大阪でも秋田弁っていう感じも含めて、若い頃からそうなんだろなって思う。

石川 そういうところあるかもしれない。

藤本 良いとか悪いとか、正解不正解とかじゃなくて、自分の中で見えてるイメージを粛々と組み立てていく人っていう感じが、ナレーション録りを見ても思いました。

石川 今回のナレーターのかたは初めてのかただったんですけど、すごい良かったですよ。上手かったです。わらび座で舞台やっておられるだけあって、声のキレがすごい良かったです。



矢吹 すごい良かったら。

石川 わらび座さんに関しては、私にドキュメントの番組の作り方を教えてくれた、いま、たまたま制作部長をやっているプロデューサーが、わらび座の「政吉とフジタ」を観劇して、やっぱりもらえないか？と考えたようで、私は私でわらび座の俳優さんに一度ナレーションをお願いしてみたいと思っていて。

藤本 僕たちも前号でわらび座さんの特集をさせてもらって、つくづく思ってたんですよ。なんでこんなにいい俳優さんがたくさんいるのに、テレビやラジオに出てないんだろう？って。わらび座って一定のクオリティがある人たちなのに、秋田の人たちがそういうふうに理解していないっていう感じがするから、そこをもっと広げてくれるのがテレビやラジオの放送メディアだよなあって。そう思っていたところに、今回のナレーションだったので。さすが！と。

石川 大阪だと、バラエティがあつて、吉本の芸人さんがバンバン出てついでうのがありますけど、秋田って独自の放送枠がまずないんですよ。ニュースぐらいしか。バラエティって言うのも月に一回くらいだから、どうしてもタレント発掘に至らないというか。一同 うーん。



藤本 確かに。地方のテレビマンの声が聞こえてくることって、それこそ「水曜どうでしょう」のHTB（北海道テレビ）藤村さんとか、関西だと読売テレビの西田二郎さんとか、ほんの一握りだと思っんですけど、みなさん表現できる枠があったからこそですもんね。

渡邊 テレビは少ないんですけど、ラジオに関しては枠が多いんですよ。だから作り込むっていうよりも、いかに放送し続けるかみたいなところに迫られてしまっているようなところがいいなと思ってるんですけど。

石川 ラジオのほうがシンプルだね。藤本 ラジオって編集をするイメージがあんまりないというか。おもしろみがまた違いますよ。

渡邊 生な部分が多いので、自分が思ってもいないことが出てきて、ワッって思う瞬間がおもしろいって思いますね。

矢吹 いまやってる高校生向けの番組もおもしろいよね。

渡邊 あれは、中高生向けの番組をやりたいよってところからはじまったんだけど、とにかく僕がやるんだってらどうしようかなって考えて。毎週秋田駅前に行って、テーマを決めて、その場で中高生にインタビューをして。いまの中高生が実際に何を思ってるのかっていうのを調べるという。





藤本 いいなあ、ライブ感あって。

渡邊 でもはじめたときは、高校生に「ラジオってなんですか？」って（笑）。「ラジオって何で聴くんですか？」って聞かれて「ラジオ」って答えて（笑）。

一同（笑）。

藤本 確かにいまラジオの機械ないもんなあ。

渡邊 でも実際、高校生とかに聴いてもらわないと、思っていて。

藤本 なべちゃんが高校生のときは、ラジオから流れてくる音楽を好きになって、っていう自分の体験がきつとあるんだよね。

渡邊 そうです。まさに。ラジオっ子藤本 逆にガクさんがラジオやるとどうなるんだろう。なべちゃんがテレビとか。

一同（笑）。

すごく大きいんだよね。なべちゃんい幸せだね。

渡邊 ある意味（笑）。

藤本 ちなみにガクさんが懂れた先輩

渡邊 でも、次異動するなら、制作とか報道じゃなくて営業でもいいからラジオに関わりたいて思います。

一同 は〜。

藤本 泣けてくるね。

渡邊 やっぱ自分を形成するものがラジオだから。

藤本 すごく私的なことだね。でもそれが

っているんですか？

石川 いますよ。退職されたカメラマンのかたとか。いまだに電話がかかってきます。ふた回りぐらい上なので、71歳ぐらいだと思っんですけど、もうもうもうもう。

藤本 どういうふうにすごかったんですか？

石川 撮るものに対してすごく明確で、ほんと良い画を撮るんですよ。日本テレビの「NNドキュメント」っていう番組のカメラマンになりたくてこの世界に入ったかたで。番組の作り方とかを全部教えてもらいました。お酒が好きで、だいたい夜の8時ぐらいいまで編集すると、「行こう！」って。



朝う時ぐらいいですって。

一同 え〜！！

石川 実は今回の甲子園の番組の、金足農業の映像は、ほとんどそのかたが撮っていて。あれは30年前の映像で、ふつうは編集したものしか残ってないんですけど、嬉しいことにマザーテープっていう元映像が残ってたんですよ。

一同 へえ〜。

矢吹 タイムカプセルみたい。

石川 「ありがとうございます！」って言いながら編集しました。

藤本 いい話だなあ。

石川 当時は報道の番組だったんで、1分くらいのニーズじゃないですか。そうすると監督のインタビュも「残念です」の一言くらいしか使われない。だけどそのかたの撮った映像を見ると、

選手に向けていい言葉を残したりしてるんですよ。当時は使えなかったんですけど、いまだと番組にすることができるの、まんまもう。

藤本 すごいなあ。

そのテープには偶然出会えたんですか？ それとも探したんですか？

石川 今回はまず資料室で検索をしてでも検索ではあまりひっかかってこないんですよ。それで先輩に電話をして、「どの辺に置きました？」って聞いて、「入って右に行ったらその奥のほう」って（笑）。で、玉手箱みたいなのがあって、開けたら中に。

藤本 すごい！ だけど昼間の出雲くんもそうですけど、なべちゃんも今夜ガクさんと一緒だって言ったらやけに緊張してるし、みんなガクさんへのリスペクトがすごいよね。

渡邊 遙か昔に一回だけ飲んだ席でガクさんに言われたのが、放送局に入ってきたのに、やりたいことがないとか作りたいものがないみたいなのが信じられないって。

一同（笑）。

渡邊 入ってくるっていうことは、何かやりたくて入ってくるってことだから、みんなやりたいことあるだろ？ やろうよって。

青谷 熱い。

藤本 今日昼間に出雲くんが言ったた



のは、ABSで良かったって。地方局にいるからこそ、すでに評価されたり有名な人ではなくて、市井の人々に光を当てることができる。だから良かったって言うってんですけど、ガクさんはいまABSにいて良かったなって思うところはどこですか？

石川 出雲と同じだと思っんですけど、ずっと密着できるっていうのは良いところだし強いんですよ。日テレにしてもずっと秋田の川反を30年追うことはできないじゃないですか。でもうちはできる。秋田の酒造りしてる人を春夏秋冬追って番組にできる。それは日本テレビにもフジテレビにもできなくて、秋田の放送局だからできるっていう。とにかくまずはそこが一番良いですね。秋田が好きで戻ってきたので、そういう人たち取材もできるし、全国に発信できるっていうところがやっぱり良いですね。それにうちの場合50年前からVTRがあって、フィルムが残っている。そういう番組を作ろうと思えばできるっていうところもありますね。秋田のすべてを50年ぐらい撮り続けてる放送局なんです。その素材をふんだんに使って、いまもう一回引っ張り出してきて、新しい風を加えていってっていうのも楽しいですね。

藤本 これからさらにおもしろくなりそうだな。



それぞれの、あきたたびじょん



1月13日(水)

ABSのお二人との熱い夜を経た朝、僕たちは秋田県庁第二庁舎のロビーに集合しました。「よ」の字が限りなく小さくて、一瞬「あきたびじん」に見える「あきたたびじょん」のポスターをはじめ、さまざまなデザインワークで秋田県のPRを担ってこられたデザイナーの梅原真さん。普段は高知県にいらっしゃる梅原さんがちょうど来秋のタイミングゆえ、お話を伺えることになっていました。さらに続けて、佐竹知事とも約束をいただいているということで、今日はみんなどこか緊張気味。全員でギュウギュウ詰めになってエレベーターに乗り込み、いざ梅原さんが待つ会議室へ。



秋田県あきたたびじょん
アドバイザー

梅原
真さん

66歳

藤本 今回「ローカルメディア」をテーマに、地方から発信していくことの意味について考えたいと思ってるんですが、そもそも『のんびり』は、この表紙にずっとある「あきたたびじょん」という言葉を僕たちなりに体現していくことにこだわってきたんです。ここであらためて「あきたたびじょん」というコピーに込めた思いを聞かせてもらえますか？

梅原さん（以下敬称略） 日本を見たときに、各県全部同じになってしまったと思いますよね。青森県も高知県も宮崎県もどう違うの？ って。つまり、それぞれの県にそれぞれ別の風土、個性があるのにもかかわらず、なんかみんな同じになってるなと。今朝もタクシーの運転手さんに「どこから来られたんですか？」って聞かれて「土佐からです」って。土佐には雪がないんですね。で、窓から風景を見ると雪が降っている。でも雪が降っていなかったらひょっとしたら高知かもしれないって思うわけで、別の土地へ来たんだっていうことを教えてくれるのは、結局、自然かいなと。人間が道路を作っちゃうとみんな一緒になっちゃってるなあっていうのがベースにあります。なので、それぞれの県がどういう県になりたいのかというビジョンやメッセージがまったくなくてことがずっと気に

なっていました。それぞれの県が自分たちがどこへ向かうのかはつきり言うべきなのにな、というのが「あきたびじょん」の大きな考え方のもとでした。それで、政治って、産業を作らなきゃいけないとか、あるいは福祉をしゃくちやいけないとか、そういうことを語るもとに、経済っていうのが一番最初にあるよね。例えば県の豊かさ指標はいわゆる経済の指標を中心に語っていくわけですよ。でもそうやって経済を語っていったってその先のことは言わないじゃない。例えば2ヵ月くらい前に国連に安倍総理が行ったよね。

藤本 ええ。

梅原 そこで演説してるのをテレビで見たら、「エコノミック」を3回言ってた。

藤本 うーん。

梅原 「エコノミック、エコノミック、アーンドエコノミック！」って。3回目はこっち（逆方向）を向いて。

一同（笑）。

梅原 恥ずかしー！ と本当にそのとき思ってた。

藤本 ほんとに。

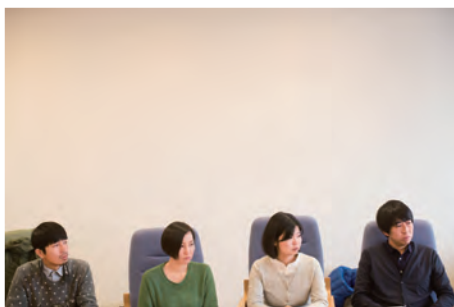
梅原 エコノミックを3回言った後「だからここに行きましよう」という話はないんですね。国連ではその話をしはしたい。経済、経済、経済の後に、こんな国に日本はなりますって言った

らかったええのに、3連発で経済を言っておしまい。ひょっとしてそこだけ編集してたのかもわからないけどね。だから、まずはどこに行きたいのかのビジョンを示してくださいっていう。

藤本 それぞれのビジョンを。

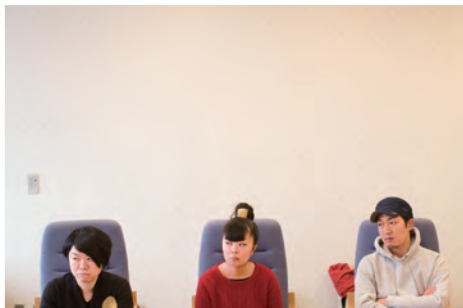
梅原 僕は政治家じゃないので答えは出せないわけですよ。なので、自分たちの考え方は自分たちで持ってみようよと。エコノミック、エコノミックって言う前に、自分たちはこうなりたいんだっていうメッセージが要るでしょと。だからこそエコノミックが要りますっていう話ですね。こんなことを言いたかったのが「あきたびじょん」だったのね。

藤本 なるほど。



梅原 そしたら佐竹知事が去年「高質な田舎を目指す」と、こうおっしゃった。あきたびじょん、すなわち秋田のビジョンはなんですか？ っていうその答えを知事は「高質な田舎」って一言で言っちゃったのよ。すごいなこれは、と。秋田は「高質な田舎」を目指せばいいと。高品質でも上質でもなく、「高質な田舎」という、この言葉にはびっくりしちゃいました。

藤本 その知事の言葉は僕たちも本当に興奮しました。すごい！ と。そしてその言葉を導いたのもやっぱり「あきたびじょん」ってコピーの成果だと思っんです。そういう意味では僕たちも「あきたびじょん」っていう言葉を受けて生まれたものなので、あきたび



じょんが、イコール全国それぞれの町がビジョンを持つことをメッセージしているように、『のんびり』も秋田の題材をとおして伝えたいのは、『のんびり』を読んでくれているかた、それぞれの地元のことなんです。ただ、それを率先して声に出したり、カタチにできるのが、いまやっぱり秋田なんだと。梅原さんもそう思われて秋田に関わっておられるんじゃないかと想像するんですけど、梅原さんは秋田の一体何が他県と違うと思われませんか？

梅原 以前知事と話していたときに、国の重要無形民俗文化財が一番多いのは豊かな証拠なんだとおっしゃったんですよ。そういうことを自分なりに考えてみると、お祭りであるとか、無形の文化がこれだけの時間をかけて残ってきたというのは、生活のベースの部分が確かに豊かであって、そういうものを残していくとも思っていないくて、持続していくことが当たり前のこととして残っていくちゃってるとなところがあると思っんです。すでにベースとしてこういうものが大事だよねっ

ていうのが、秋田の暮らしのなかに一定にある。だから『のんびり』にしても、ふつうは行政のボーダーがあるわけよ、絶対に。しかしこういうメディアができちゃってるとっていうことは、そういう教養の厚い層があって、そういうなかから無理なくできている。本当に無理がなかったように思います。それこそ予算措置というものはある意味行政の手続き上で判子が四つぐらい押されているわけですよ。でも途中で押さなかった人はいないわけですよ。それは秋田の風土のなかに仕込まれたものだったんじゃないかなと思います。

藤本 梅原さんも高知県の広報誌『とさのかぜ』を作られてましたが、あれはどういうふうにして生まれたんですか？

梅原 橋本大二郎（元高知県知事）っていう人が、政治にも文化が必要なんだって言いはじめました。どういうことかと言うと「文化の県づくりを進める県民ネットワーク」という委員会に25人を招集したんですね。僕はその25人のうちの一人で。土木事業にしても何にしても文化が必要でしょと。街のなかでどんな木を植えるの？ 枯葉が落ちてやめてくださいよって住民のかたが言ってるわけですよ。「木を植えるなんて」って。けど、それはどう

なの？ と。あらゆる行政の政策には、文化的な目線が必要であると、そういう委員会でした。そこでいろいろやっているうちに、広報誌が必要だって県が言いはじめました。そのメンバーはあらゆる人がいてですね、僕がデザイン的な要素の仕事をしていたので、私に白羽の矢が立ちました。高知県の文化的な広報誌ということで4〜5人メンバーがチョイスされた。というところからはじまったのが『とさのかぜ』で、予算も僕たちは要求していません。向こうが「こんだけやってくれ」って。

藤本 へえー。

梅原 それが、一定の評価を得てくると、ある時点で予算が倍ついた。倍っていったって大したことないで（笑）。自分が編集長に仕立てられて作っていきなから、やるんだったらおもしろがってやろうぜと。結構、ラフで自由奔放にやってきた。その中には、笑いがなくともおもしろい。高知県のビジョンは笑いです。笑いはなんであるかっていうと、経済が47都道府県で47番目のでもう笑うしかないのよ。46番目に行こうとしたなら一生懸命になるしかない。なりたくないよ。バケツの水に例えるなら、一番底に高知県があると。上へ行くこととあっぶあっぶする。それなら、バケツの底を抜いたらええ。



底を破った向こうっかわに幸せがある
と。そんな感覚で『とさのかぜ』を作
ってました。

藤本 そうみると、いまの秋田と状況
が似てますよね。

矢吹 底の方へと(笑)。

藤本 『とさのかぜ』はどれぐらい続
いたんですか？

梅原 13年。

一同 すごい！

藤本 5、6年くらいだと思ってた。
ちなみに梅原さんは『のんびり』をど
んなふうに見ていただと思いますか？

梅原 新しい取材方法だな、と思った
ね。取材対象にアブローチして、それ
に向かっていろいろお話を聞き、それ
を編集していくっていうのがこれまで
の流れやったと思うけど、もう、自分
らが出てるもんね。

一同 (笑)。

梅原 最初見たとき、「お前ら出すぎ
や！」と思った。「なに自分写っとな
ねん！」って。

一同 はははは！

梅原 そんな感じでしたけども、藤本
くんと喋っているうちにおもしろいと思
ったのは、経過をオーブンに、隠し
事することなく取材をアブローチする
ことによって、いままでになかった取
材形態、嘘を言えない感じ。改ざんでき
ない取材方法ですよ。取材したこ



梅原 大手代理店がずかずかと来るよ
うな手法ではないけれども。それにし
ても、藤本くんも僕も県外の間人です
から。ごつ遠慮がある。地元のこと
は地元の人があるべきでしょってのが
あって、さっきから言っているそれぞ
れの県人の個性は、自分たちでおやり
になってくださいっていうのがベースに
あるので、そういう意味では、秋田の人
たちと一緒にやるという部分でも、こ
こにいまいるメンバーのバランスを見
ても上手にやっているな。自分の良
し悪しは自分でわかりにくいので、少
しロングな目線で地元に近い人と、と
んでもないロングな人と。これが一緒
になってやると、逆に個性というもの
が見えて、いいなというもののづくり
ができるので、その辺は作り方のプロ
セスで危惧してたことがクリアになっ
ているなと思います。

藤本 ありがとうございます。本当に、
秋田にしかできないものを作ろうと思
ってやってきたんですが、その上でさ
あこの先どうするか？ っていう感じ
なんですけど、梅原さんとして『のん
びり』、もしくは地方のメディアがこ
うなったらいいのにな、と思われるこ
とはないですか？

梅原 自分は『とさのかぜ』が終わっ
て5年くらい経つけども、本当に自分
たちが作りたいものを作るためには、

もう読者からお金をもらうしかない。
僕が考えた方法はそれしかなかったで
す。なので、「会費1万円やで」って
言いながら読みたければ会員にならな
いと読めないよといったものを作っ
て、最近1号目を出しました。おもし
ろいことを仕立てて、その会員さんが
四万十川にやってきたり、四万十川に
やって来るとそこでおもしろいことを
する企画を盛り込んで、1万円なら許
してくれるんじゃないかということ
すればいい、っていうふうに思ってや
っているんだけど、いままでで会員が
178人だから、いま集まったお金は
178万円です。それで年間3回とか、
なかなかできないでしょ。それが、い
ま俺が悩んでいること。

藤本 『RIVER』という四万十のやつ
ですよ。

梅原 そう。僕はテクノロジーに一切
タッチしない男で、自分のホームペー
ジもたない。露出をしない。Twitter
って何かよくわかってない。そっち系
を使わずにきているけど、やがて使わ
なきゃいけない状況に僕自身があるか
もしれない。だからソーシャルメディ
アも含めた『のんびり』をね、読者が
満足しながら自分たちの表現をしてい
って、またお金も必要なわけですから、
それをどういうふうに上手くコーデ
ィネートして持続していくのか。むしろ

俺がそれを遠くから見せてくれんかと。
それより俺のやつの方がやばいねん。

一同 (笑)。



とを聞いてまとめれば「ここ、俺はこ
う言っただけとちょっと違うんだよね」
っていう話になるんだけど、そうじゃ
なくて顔と顔を合わせて本人へアブ
ローチしていく、そこがまったく違う。
取材の発明やなど。空気がよく伝わ
る。要するに、これまでは相手の言っ
た凝縮された言葉を上手にまとめるこ
とがライターの仕事であり読者へのサ
ービスだったわけや。ところが違って、
相手の言葉をほとんどそのままいた
な感じだから、一瞬、ライターの力は
どこにあんねんと思うんですけど、相
手のおっしゃっていることをいかにそ
のままもって表現できるかを念頭に
おいた取材方法や技術があり得るわけ
で。新しい若者の取材方針やなど。短く言
えば。

藤本 ありがとうございます。そこま
で理解していただけて嬉しいです。

のんびり イズムを 発信する



梅原さんへのインタビューを終えた僕たちは、そのまま秋田県庁本庁舎へと移動。続いて秋田県知事の佐竹さんにお話を伺います。地方から発信していくこと。その回答を得たようなこのインタビューは、あらゆる地方で暮らす人々に読んでいただきたいと切実に思います。佐竹知事、秋田という土地が持つ教養の象徴のような人でした。



藤本 早速なんですけど、『のんびり』の感想を聞かせていただいてもいいですか？

佐竹知事（以下敬称略） 名前のとおりなんだけど、怠惰な意味ののんびりじゃなくてね。いま、非常に厳しい競争社会のなかで、みなさんビリビリしている、そういう世界だけれども、そういう世界だけではないんだなというか。

藤本 はい。

佐竹 そういう意味で、これはおもしろいのよ。話題も、いろんな捉え方のもとね、いまの秋田を広く捉えてるから。

藤本 ありがとうございます。



佐竹 こういう本によくあるのはね、なんでもかんでも讃美調。それもないんだよ。

一同 あはは。

佐竹 割と客観的でね、「ふるさととは良いんだ」「日本一！」と、そうじゃないのがいいですね。

藤本 ありがとうございます。4年前ぐらいになりますか、梅原さんと一緒に鼎談させていただいたときの知事の言葉が忘れられなくて。壇上で知事が300人くらいいらっしゃる県民のみなさんに「僕は秋田を本場に誇りに思ってる。なんて言っちゃって、うまい飯とうまい酒がある！」って言ったんですよ。そしたら300人がドカーン！って笑って。なんて良い県なんだと。

一同（笑）。

藤本 ああいうときに、ふと自分の地元関西を思うと、結局、産業とか経済とか数字の話ばかり。なのに秋田県の知事は、こんなにも堂々と「うまい飯とうまい酒がある！」っておっしゃるのを見て、これこそが豊かさだってすごかったんです。こんなふうに地方の人たちが、当たり前前に自然な言葉を出していくとか、発言していくってことがすごく大事だと思うんですけど、知事はそういう地方からの発信ってことに対して、どういうふうにお考えですか？



佐竹 秋田はいつもね、田舎だと。遅れてると。なんとなく東京は進んでて、素晴らしい。我々は別の人種だ、みたいなね。遠慮がちというか、卑屈というか、そういうところがあったね。もちろん秋田は東京のような都会ではないし、高層ビルはないし、交通手段もそんなに良くないけど、人が生きる場として東京と比べても遜色はない。や

ぱり、分かち合いもなければ。
藤本 はい。
佐竹 そういう分かち合いを理解するためには、人の教養、素養がいる。学問ができるできないを別にしても、人間たる素養ね。それが田舎は高いのよ。地域はね、競争があると同時に分かち合いの精神がある。そういうなかで、各々が才能を伸ばしながら、その分野

っぱり全体的に楽しんでる人が多いんだと。もうちょっと大きく言うけどね、いま世界で争いがいっぱいある。経済社会のなかで勝った負けたと、これはしょうがない。私ももっと競争に強い産業を作ろうと言ってますよ。でもそれはそれとして、グローバル社会のなかで競争というのは避けられないけれども、それだけでは人間、疲れる（笑）。
矢吹 ほんとに。

佐竹 競争があってもいいけども、暮らしてね。日本人はものすごい労働時間で、いっぱい働いてるけど満足感がない。そうするとね、いつのまにか、金を取ることが満足感になっちゃってね。でもその満足感だと世界は滅びるんだよ。そうでしょ。奪い合いですよ。奪い合いのなかに競争があってもいいけども、やつ



の競争の社会で頑張ってもらえばいいねということですよ。
藤本 なるほど。

佐竹 郷土にプライドを持って、お互いに分かち合いながら日々充実感を持って暮らすという、そういうところが増えれば増えるほど争いはなくなるんじゃないかと。

藤本 そうですね。
佐竹 みんなで奪い合いしてる間は争いはあるんですよ。秋田の人は積極的でないと言うけども、これはね、マイナスでもあるけどプラスでもある。
藤本 そうですね。

佐竹 人に迷惑かけないからね。人から奪わないから。人から奪わないって



非常に良いことですよね。みんなが積極的になってぶつかって、奪い合いはじめたらね、これはいまの世界でしょ。だから人類の持続性。ちょっと大げさだけどね。

藤本 いや、そういうことだと思いません。

佐竹 人類が持続性をもって生きるとすると、ある程度ね、田舎がたくさんなければね。

藤本 いやあり、ほんとに。

佐竹 しかも田舎の暮らしているのはね、実に省エネなんです。東京に高いビル建ててね、真っ昼間から延々と電気つけなきゃ暮らせない。夏は冷房で冬はガンガン暑くして。移動するにしても全部車と電車。すぐエネルギーが必要ですね。人間のエネルギーも。人間が消耗しちゃうんだよ。

藤本 知事のお話を伺っていると、秋田の人のなかに、すごくよそ者の視点というか、秋田を俯瞰で見ている部分を感じてますけど、それはどうしてなんでしょう？

佐竹 私がよく秋田の人に言うのはね、天動説になるなと。秋田の人はどちらかというと、内側から外を見る習性がある。それは自分のところで最低限の食料が確保できても大きい。よくあるのは、出稼ぎに行った先の大手の会社が大規模にリストラをする。

でも農家出身の人はね、それで飯食えないわけじゃないんですよ。収入は減るけども、次の仕事まで食えるわけだ。都会だったら、またどっかに移るしかないでしょ。秋田の人はほとんど自分の家だから。だから外の情報にうんというののはね、それは確かなんですよ。井の中の蛙ではダメだと。秋田もね、宇宙から俯瞰するかどうかと。ですから秋田というものを中心で考えすぎると、独りよがりの井の中の蛙。これは困るんですよ。

藤本 ええ。

佐竹 昔の藩政時代ならいいけども、いまのグローバルイズムのなかで秋田が「高質な田舎」であっても、それをどう活用するかという知恵も必要だし。いろんな能力を発揮するにはよその情報が必要。そういうことで、できるだけよその人のね、よその人という言い方がおかしいかもしれないけど、秋田で暮らしたことのない人がね、秋田をどう見るかも知らねば。あまりにもね、秋田秋田で固まりすぎると退化化するんですよ。

藤本 なるほど。

佐竹 維持するというのはね、いろんな情報が入ってきて、常に補正して。

藤本 更新されていく感じですよ。ね。
佐竹 そうそう。いいものは残しながらも変わるものは変えていく。その



部分は外の情報ですよ。

藤本 なるほど。『のんびり』は結果的にこれまで4年間やらせていただいたて、僕たちも知事の言葉を借りるなら、ほとんどチェンジして、更新していかなければならないんですけど、何かしら知事として、『のんびり』や秋田のメディアがこうなったらいいんじゃないの？ こういうことやってみれば？ みたいなことがあればぜひ、お聞きしたいなあと思うんですけど。

佐竹 一つはね、「のんびり」という言葉があるけども、つまりはのんびりイズムを作るってこと。

藤本 ああ。なるほど。

佐竹 そのための情報発信。秋田発でも東北発でもいいんだけど、こういう流れをね、東京対地方とかいう対立ではないけれども、地方がこういうのんびりイズムで、ずーっとね、東京首都圏を包囲しちゃうといった、そういうことをね。

一同 ウフフフ。

藤本 いやあ。いいですね。

佐竹 これは政治を変えるかもしれないね。

藤本 おお！

佐竹 これが平和国家の目指す道かもしれない。いずれ日本のね、これから日本人の、21世紀後半の生き方に関係しますよ。のんびりっていうのは、

ぼやっとしてるっていう意味じゃないですよ。

一同 (笑)。

佐竹 のんびり考えるとね、非常にいいものが出るんですよ。何かに追われてキリキリ考えてるとね、できないですよ。だから意外とね、人間の頭なんていうのは、のんびり考えるほうが平易に動く。だから一つね、そののんびりイズム、のんびりイズム運動をね。

藤本 のんびりイズム運動！ いいなあ。僕たちはいま、すごく日本というのか、中央というのかが、搾取の方に向かっていて感じていて、でも自分たちはシェアする方の世の中に変わっていきたくて思っていて。ここに大きな隔たりを感じるんです。そんななかで、知事がそうやって、堂々と共有していく、シェアしていく時代なんだから、この町から言っていたくことが、僕たちにしたらすごく頼りになるし、あらためて僕らはそういうなかで、まっすぐ堂々と胸を張って「のんびり」って言えてきたんだと。

佐竹 だからこれをどうするか。『のんびり』発祥の地が秋田でね。そういう意味では応援します。

藤本 ありがとうございます。

佐竹 だからこれからは秋田が中心でなくてもね、この思想をね、秋田も交えながらね、同じ例えば東北6県とか

に広げて、のんびりイズムが東北6県に。それが秋田発だと。そういうなかで仲間を作っていくって。それがさらに広がっていくとね。

藤本 はい。

佐竹 単なる出版事業っていうだけではなくて、のんびりイズムを広げる季刊誌だと思えば、その仲間作りもね、それはできると思うんだよね。

藤本 ありがとうございます。

佐竹 そう思ってる人いっぱいいると思うんだよ。奪い合いの世の中には限界がありますからね。ただね、商売やらないと飯食えないので、能力は活かしてね。経済は必要ですから。ただね、去年の偽装事件のようなものはまったく逆ですよ。あの担当の人が『のんびり』を読んだとね、たぶんああいうことしない(笑)。

一同 (笑)。

佐竹 業績が下がったとか、同業者の業績が上がったとかね。ビジネス書ばかり読んでるからあなるんですよ。これ(『のんびり』)を読んだとね、悪いことしようとは思わなくなるよ。

矢吹 送っておきますか。

一同 (笑)。

佐竹 業界紙ばかり読んでね、毎日グラフばかり見てね、「これでやると俺のボーナス減るな」とか、そういう



ことばかり考えてるとダメだね。

藤本 数字で表せないものを表現していくっていうのは、なかなかね。

佐竹 自分たちがどういう形式でやるかはわからないけれども、身近な仲間を増やしてね。それでイズムを作っていくって、ネットワークを作るといって、側面から支援するし、いろんな面でWEBもうまくタイアップしてやっていく方法もある。しかし作る人はあまりのんびりしてられないな(笑)。

一同 (笑)。

藤本 そうなんですよ。今回もどうなることか……。

佐竹 自分ののんびりをね、みんなにくれてやると思えばいいんだよ。

一同 おお！

藤本 なんかつとするなあ。

のんびりイズムを共有するための秋田からの情報発信。佐竹知事の言葉はとても明確で、地方から発信していくことの一つの意味を示してくれた気がします。鉄で土を掘り起こしては、新しい空気を取り込み、真の教養を育んできた秋田の土壌。その懐の深さに僕はあらためて感謝を伝えたいような、そんな気持ちでいっぱいでした。

地方出版社 という 生き方

県庁食堂

知事のインタビューを終え、せっかくならばと県庁食堂へ。知事の「のんびりイズム」や「のんびりイズム」という言葉を思い返しては、思わず笑顔になるのんびりチーム。ワイワイ賑やかに昼食を楽しんでいると、知事がふつう〜にお昼ご飯を食べにやってきました「先ほどとはどうも」なんてやりとりに、さらに場の温度が上がります。近くで一緒にご飯を食べていた県庁の職員さんが、「だいたいいつもあそこの席なんですよ」と教えてくれて、僕たちは、テレビの近くの席でのんびりお昼ご飯を食べている知事の姿を横目に見ながら、未来に向けた力強い言葉をくれた知事に、何か恩返しをしたいねと、そんなことをずっと話していました。

無明舎出版

和やかな昼食を経て、次は常々お会いしたいと思っていた、無明舎出版の代表、あんばいこうさんの取材です。『のんびり』6号日本酒特集は『夏田冬蔵——新米杜氏の酒造り日記／森谷康市』9号秋田弁特集は『標準語の村——遠藤熊吉と秋田西成瀬小学校／北条常久』と、過去の『のんびり』特集において重要な起点となったそれら2冊の書籍だけでなく、僕は数々の無明舎出版さんの書籍から、秋田のことを勉強させてもらいました。同業の大先輩として緊張を隠せないまま、秋田市内の住宅街のなかにある無明舎出版へと向かいます。今号はインタビューが続きますが、40年以上ものあいだ、ここ秋田から全国へと発信し続けてこられたあんばいさんの言葉はとてもリアルで、その静かな情熱に全員が心を打たれました。どうか読んでください。

藤本 『のんびり』を作るにあたって、本当にたくさんの方の無明舎さんの本を参考にさせていただきました。
あんばいさん（以下敬称略） ありがとうございます。
藤本 こちらこそです。ありがとうございます。とにかくこの本棚に圧倒さ



れるんですけど、無明舎さんの刊行物は、何冊あるんですか？

あんばい 数えたことはないんだけど、1000〜1200冊ぐらいだよ。

一同 へえー！

藤本 これだけ出版を続けていくことの、モチベーションみたいなものはないところにあるんでしょうか？

あんばい モチベーションというかね、結局、一番大きな野心は、続けていくということ。

一同 うーん。

あんばい これが一番大きいんですね。続けていくためには、いわばいまの本がある程度売れて、それが次の本の資金源にならなきゃいけないわけだからお金っていうのは非常に大切で、そのことは常に忘れないっていうか。これはすごくいいことだから秋田のために出さなきゃいけないとか、東北にடுத்துごく貴重な文化遺産とか、そういうことが先走ったとき、非常に怖いですね。

一同 うーん。

あんばい ものすごいレベルの高い原稿とか、どんどん押し寄せるときがあって、やらなきゃいけないなって使命感を持ったときが一番怖い。

一同 ふふふふ(笑)。

あんばい それはね、突き放さなきゃいけない。

他にもあるものなんでしょうか。

あんばい 僕らが学生のときには、弘前に津軽書房、九州の博多に葦書房っていうのがあった。学生時代からこの二つに「すごいなー、地方でもやれるんだ」って憧れてたんです。初期の15年間ぐらいはこの二人が師匠みたいな形で、しょっちゅう抱持ちみたいなことをしてました。当時、津軽書房っていうのは長部日出雄さんっていう作家の『津軽世去れ節』っていうのが直木賞をとって、弘前の出版社から直木賞が出たっていうのが大変な話題になって。葦書房は山本作兵衛っていう人の『筑豊炭坑絵巻』っていう、この記録画が2011年、世界記憶遺産になったって大騒ぎしてたけども、45年ぐらいい前にその本を出してものすごい注目されてたり。そういう出版社で、とにかく憧れで。その先輩たちがいて「じゃあ秋田でもやれるな」っていうかなり軽い気持ちで踏み込んでしまった。

藤本 なるほど。

あんばい 秋田で生きてきて、最初は先生かなんかをやるもんだと思ってた。でも学生の頃から少しずつ変わって、ここで何ができるかってことを考えたその先にあった光が、その二つの出版社だったんですね。

藤本 じゃあ立ち上げる時点の目標はもちろん「続けること」ではなかった



わけですよ。きっと。

あんばい うん、それは違いますね。1冊目がすごくヒットしたんで、ものすごいチャロイなあとと思って(笑)。

一同 (笑)。

藤本 それが『中島のでっちゃ』ですよ。

あんばい はい。一万部売れましたからね。

藤本 はー！ すごい！

あんばい こんないい商売ないって思

ったのが正直なところ。でもその次から出せども出せども全然売れなくて、でもまあ思いとおりにいかないのは仕方ない。でも好きな仕事をやってるんだから、一瞬でも長くやっていきたいと。とにかく持続する。そういう意識に変わったのは、はっきいうと、20代は自分にもものすごく自信があったんだけど、20代過ぎたら、「俺って結構、才能ない」って気付いたわけ。

一同 ふふふ。

あんばい 周りはね、作家でもなんでも同年代のきらびやかな才能をもった人がいっぱいいて。コイツらに負けたくない、でも絶対負ける(笑)。全然レベルが違うと思って。でも長く続けてれば、早く死んでくれるかもしれない。

一同 はははははははは(笑)。

あんばい 自分は才能がないんだから、長く続けるしかない、長く続けるにはやっぱりお金だと思うんだけど。お金を儲けようということではなくて、例えば社員に対する給料とか、退職金とか、こういうことだけは最低限きちつとし



藤本 冷静な判断ができなくなるというか。

あんばい すごい魅力的なテーマがくると、クラクラってきて。

藤本 きますよね。

一同 (笑)。

あんばい 「やってしまおう！」というの度々ありましたね。

矢吹 でもそれが売上には繋がりにくい？

あんばい そこがね、よく見えなくなってしまう。

藤本 無明舎出版は立ち上がったって何年になるんですか？

あんばい 72年に立ち上げてるんで、45年ぐらいたと思うんだけど。立ち上げたときは古本屋で、ミニコミ誌を出して、要するに何もわからなかったんだよ。秋田大学の学生だったんだよ。

藤本 へえー。

あんばい 何もわからなかったのが、76年に初めて本を出したんですね。だから72年にはじめて、76年だから、4年後に無明舎出版に改組して、いまは2016年だから、ちょうど、処女出版が出て40年目なんですけども。無明舎そのものは44〜45年。

藤本 無明舎さんのように、地元の題材をその町から出して、且つ、これだけの刊行数がある出版社っていうのは



ようと。きちっとするためには、これはかなりの博打だっていうのを捨てなきゃいけない。例えばその葦書房とか津軽書房とか無頼派って言われるようなタイプの人たちは、ものすごい借金を背負ってでも、すばらしく良い本を作って世間から絶賛されて、でも内実は火の車で、僕のとこに借金に来る。そういうものも見てるわけ。それもまあ、実にかっこいいんだけど、もうやって借金しながら出した本が葦書房は『逝きし世の面影』っていう、渡辺京二って人の本とか。

藤本 へー！ そうなんですか!? 平凡社ライブラリーのか？



あんばい 名著中の名著ですよ。

藤本 僕も大好きです。

あんばい 日本にきた外国人から見た江戸明治期の日本人の姿を描いた、あの『逝きし世の面影』って本を4000円くらいで出すわけですよ。

藤本 はー！

あんばい それが結局、会社がダメになったってことで、平凡社がその版權を買い取って、いま、20万部の大ベストセラーになって。あれは元々は九州から出た本なんですね。俺もあいう本を出せたら幸せだろうなって思ってたけど、結局閉業してしまうわけですよ。そういう世界でもあるから。

藤本 なるほど。

あんばい あれだったら僕だってどんな借金しても飛びつくなって思うんだけども、そのバランスっていうのはものすごく難しいところ。その辺は結構、臆病だった。それは出版をやる上で欠点なのかもしれないけども。原点にあるのは才能のない人間は長続きするしかないんだという思い。それはいまも同じです。

藤本 すごい。でもはやそれは、続ける才能ですね。でも実際、本を作ることはできても、それを売るための流通はどうやってスタートしたんですか？

あんばい もちろん最初は取次会社とか全然相手にしてくれなかったんだ

ら受けてますよね。

あんばい 有頂天になってますよ。

一同 (笑)。

あんばい トーハンの担当が金田さんっていう係長で、初対面だったんだけどものすごく好意的で、そのときは完全に舞い上がった。この人いい人だな

藤本 その直感すごいです。契約ギリギリで。
あんばい 自分のペースで本作れなくなると思った。どっかで気持ちとしては、出版を仕事に選んだっていうよりも、生きていくための、おもしろい生き方を選んだっていう感じですね。それがたまたま出版だったから。生き方として選び取ったっていうのはいまでもあるんだよね。どっか非常にずるく、上手く、くぐり抜けたなという部分もあるけども、もう10年か15年ちゃんと見たい。デジタルの世界をもっと見たい。それは自分がデジタルの本を出すか云々っていう問題では全然なくて、言葉を使った表現の世界がどういうふうに変貌していくのかを自分の目で見たい。それにたぶん自分についていけないだろうけども、とにかく見たい。ものすごく見たい。

一同 うーん。

藤本 あの、ちょっと話し戻すようなんですけど、取次さん、トーハンさんを断ったときの年齢っておいくつだったんですか？

あんばい 30代。30代の後半にかかってからですね。

藤本 はあー。きっと前半だった

れども、ある紹介者がいて「トーハン」(日販と並ぶ二大取次会社の一つ)との付き合いができて、いざ契約をする寸前で、やめたんですよ。いま考えると、それが、それ以降の無明舎の、あるいはここまでやってこれたことの原因だったと思うんだけど。結局、それまで東北の版元でトーハンと契約した出版社ってほとんどないんですね。うちが一番上になるっていう、ものすごい晴れがましい気持ちがあったんだけども。つまり東京の出版社と同じように差別されないで同じ土俵に上がっていいですよと言うんだけど、その代わり、例えばこういう本を出すときはこのぐらいの部数を出しなさいって、あちからの指示がものすごく強くなる。

藤本 うーん。



からいったら無理だっていうふうに酒飲みながらどんどん思ってきて、次の日ちゃんと断って。

浅田 すごいな。

あんばい ほんとうに良かったと思ってる。断って。だからいまは、逆にもう10年か15年やりたいんで、それに一番大切なのは健康だからってことで、ものすごい健康オタクになってる(笑)。

一同 ははははは(笑)。

あんばい もう10年やればね、だいたいいライバルはみんな、死ぬよね。

一同 (笑)。

あんばい いまの日本の取次の状況っていうのは、売れても売れなくても、何割かのお金が最初に入ってくる。それを返品と相殺しながら削っていくという方法です。本さえ出してれば常にお金が入ってくる。逆に言うと、本を出し続けなければいけない。そういうときに、ちょうど地方・小出版流通センターができて。

藤本 はあ。

あんばい こっちはね、買切り制なんだよ。全国から注文があったものだけが、ここから出て行く。さらに県内、東北は全部教科書販売会社がやってくれるという分担制を選んで、それで何十年間かずとやってきて。最近ではAmazonの台頭で、とにかく僕らみたいな版元にとっては、Amazonはものすごく大きいんですよ。

一同 うーん。

あんばい とにかく講談社であろうと無明舎であろうと、買う人はなんの関係もなしだから。

藤本 そうですよ。

あんばい その代わり、6掛けで4割はAmazonにとられてしまうわけだけれども、うちの場合は週3回はAmazonから注文があって、その出荷だけでも大変です。

一同 へえ。

あんばい だから30何年前にトーハ

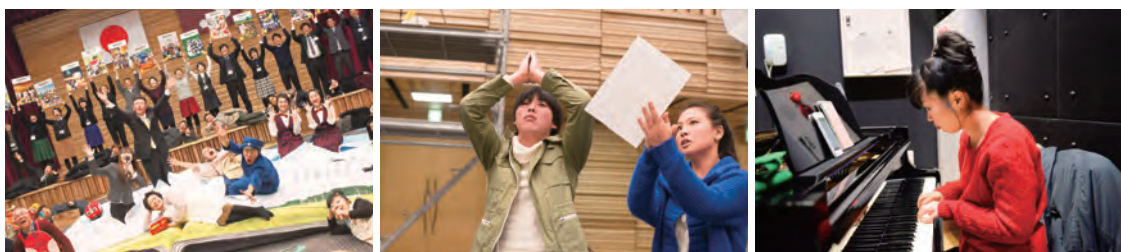


最終章

自らが たいまつと なって

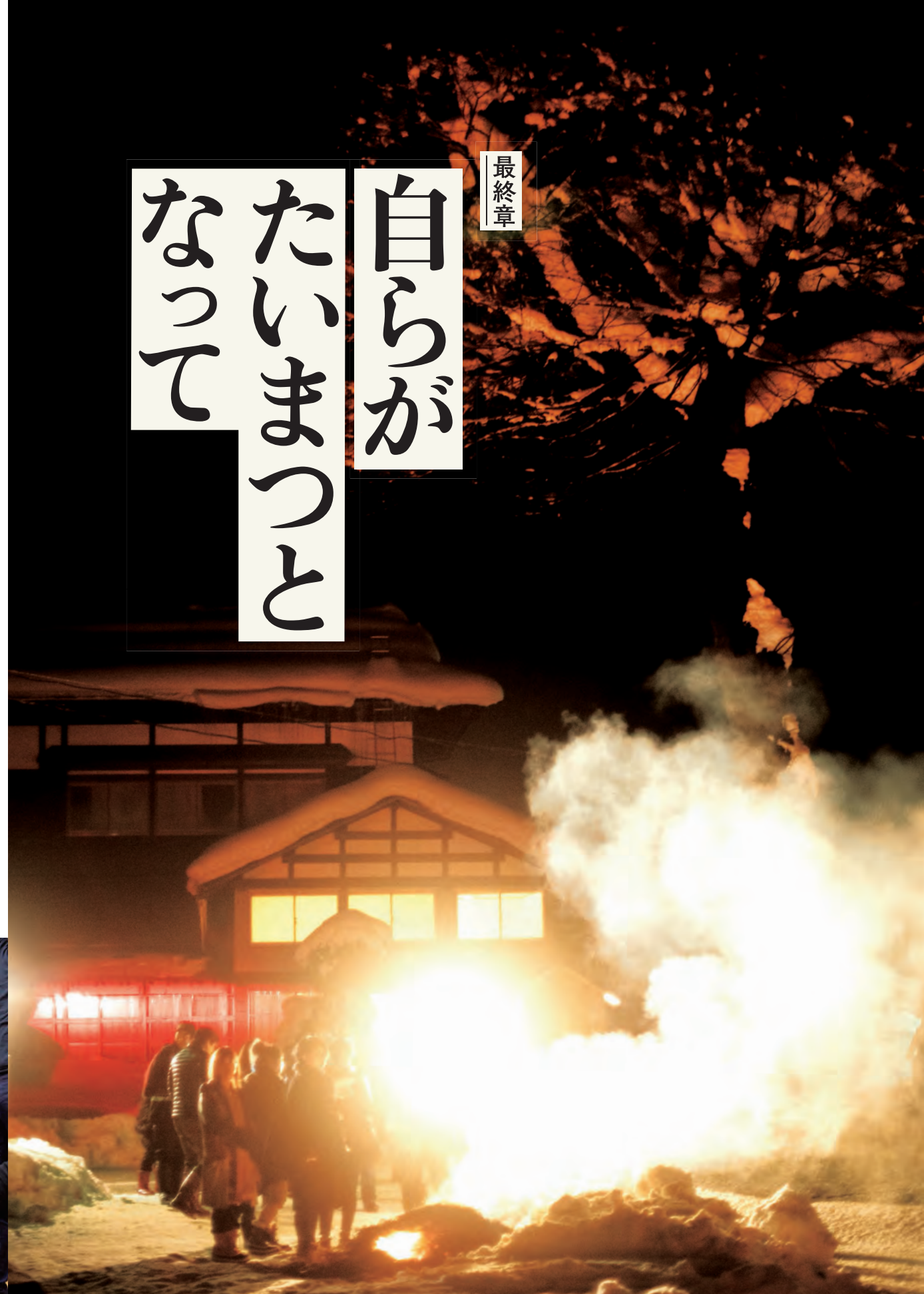
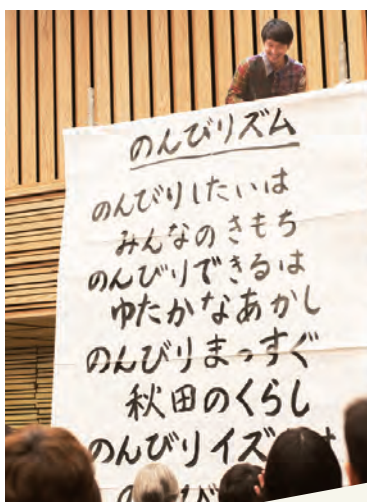
1月14日(木)

一夜明けた今日は、表紙撮影。過去最大の造作物、巨大『のんびり』を組み立てたり、足場を組んだり、猛烈に寒い雪の朝に汗かきながらメンバー全員フル稼働。そんなさなか、秘かに準備を進めていたのが、今日の撮影に参加してくれる佐竹知事へのサプライズでした。『のんびり』全号欠かすことなく冒頭に掲げているコピー「のんびりしたいはみんなのきもちのんびりできるはゆたかなあかし のんびりまっすぐ秋田のくらし」ここに知事がくれた言葉「のんびりイズムはのんびリズム」という一文を加え、それに例のごとく我らが青谷明日香ちゃんに曲をつけてもらいます。さらに、同じく表紙撮影に参加してくれる、わらび座の古閑梓紀ちゃんと片村仁彦くんに予定より早く現場入りしてもらい、振り付けまでつけてもらうことに。よりによって過去最大級に大変な撮影準備のなかで、歌も振り付けも覚えなきゃいけないという状況に心折れそうになりながら、恒例のNONのんびりタイムがスタート。しかしすでに丸4年間16号こんなことばかりやってきた僕たちです。やってやれないことはない！と、本番を迎えます。



表紙撮影を無事終えた後、ドドーン！と現れた大きな垂れ幕。そこに書かれた歌詞を見て知事もニンマリ。やつぱり秋田でのんびりと言えば、温泉でしょう！と、「いい湯だな」に続く温泉ソングを目指して作ったその名も「のんびリズム」。気になるかたはぜひ、下記アドレスで動画をチェックしてみてください。

<http://non-biri.net/information/info/308/>



1月15日(金)

毎回一大イベントとなる表紙撮影を無事終えて、今日はいよいよ取材最終日。少し早めに編集部に集合すると、ヤブちゃんからある報告がありました。なんと取材中に会えればと思っていた、101歳のジャーナリスト、むのたけじさんですが、取材日程からは外れるものの、数日後の1月20日に秋田との県境にある岩手県湯田という町で講演を行うので、その講演後15分なら時間をいただけるとのこと。全員での取材は叶わないものの、この機会を逃す手はない！と思った僕は、別取材も含め19日までだった滞在予定を一日延ばすことを決めました。となれば、いよいよ『週刊たいまつ』の現物だけでも、全員で目にしたいと思うのですが、取材初日にヤブちゃんが確認してくれたように、現在『週刊たいまつ』を所蔵する横手市立横手図書館ではデジタル化の作業を進めており、業者さんに現物が送られてしまっている状況。そこでふと思いついたのが、『のんびり』主催イベントのボランティアスタッフとして参加してくれていた石川靖子さんという女性。「確かあの人……、横手の図書館の司書をされてたんじゃないかって？」早速電話をしてみると、横手市平鹿図書館という、同じ横手市

内の別の図書館にお勤めで、今日もそちらにいらつしゃるとのこと。ということではまず石川さんに会いに行くべく横手市平鹿地域へ向かいます。

平鹿図書館

のんびり編集部から約1時間半、今回の表紙撮影にも参加いただいた森谷杜氏の蔵「浅舞酒造」の近くにある平鹿図書館に何うと、司書の石川靖子さんが待っていてくれました。するといきなり……。

石川さん(以下敬称略) これが『週刊たいまつ』の1号のコピーです。



一同 ええー！

石川 1号は持っていなかったんですが、今回のデジタル化のことがあって、利用者の知人から横手図書館がもらったものをコピーさせていただきました。

藤本 ありがとうございます。

石川 さきほど館長から連絡があつて、デジタル化を進めている話なんですけど、ちょうど現物が今日返ってくるんだそうです。

一同 ええー！!!!?

石川 今日の15時に図書館に返ってくる予定だそうです。

だから15時以降であれば見られるっていうことでした。

藤本 見たいです！

石川 じゃあ連絡とりますので、夕方で大丈夫ですか？

藤本 はい。
石川 わかりました。良かったです。
藤本 こちらこそです。
矢吹 月内は難しいってお話を聞いていたので。
石川 私もこの顚末をお話したら館長から電話もらって……。良かったです。

取材最終日にして、まさかの急展開。1号目のコピーを拝見できただけでもドキドキしたのに、ひょっとすると見ることは叶わないかもと思っていた『週刊たいまつ』の現物が示し合わせたかのように今日戻って来るなんて！と、そこにきてさらに、のんびり秋田メンバーのイマヲ(今井)が、今朝ABSのラジオを聴いていたら、今日横手市で「たいまつ焼き」という行事が行われるって言うてました、なんてことを言い出すから、毎度のことながら『のんびり』取材は最後の最後までまったく気が抜けません。会えないと思っていたむのさんにお会いできることになり、見られないかと思っていた『週刊たいまつ』の現物も見られることになり、さらに、たいまつ焼き？もはや、たいまつ！ たいまつ！ たいまつ！ のたいまつフィーバー発生です(笑)。



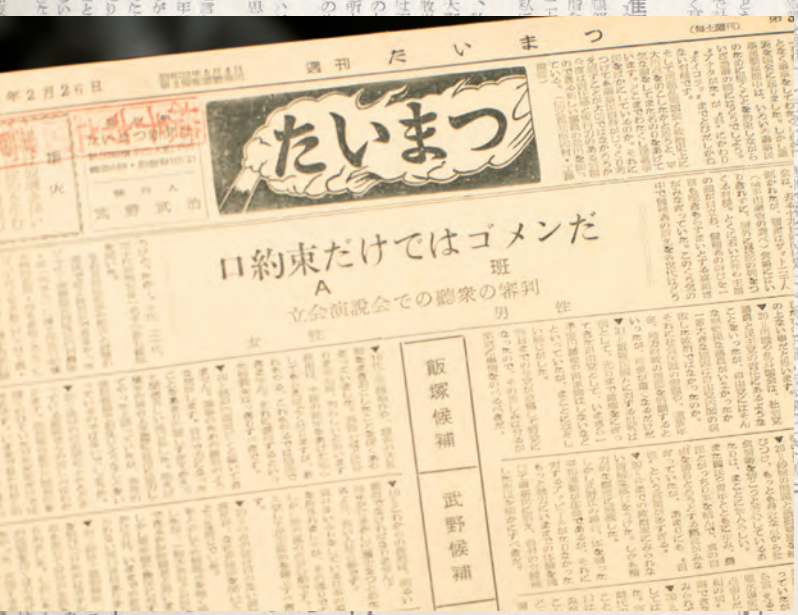
道の駅十文字

石川さんにお礼を伝え、平鹿図書館を出た僕たちは、一旦道の駅十文字に移動して、午後からの動きを話し合います。まずは、お借りした『週刊たいまつ』1号のコピーをみんなで回し読み。冒頭の「主張」と書かれた記事を恐縮ながら要約すると、「東北は日本の植民地と言われたり、遅れてると言われていて、東北人として残念ではあるが、認めないわけにはいかない。雪国で資源がとばかったりするなか、雪国でもできる産業ではなく、雪国だからできる産業に変えなきゃいけない。明確なのは東北人が無気力な冬眠状態を続けていく限り、この植民地状態からは抜け出せないということ。我々はいつまでダルマを続け

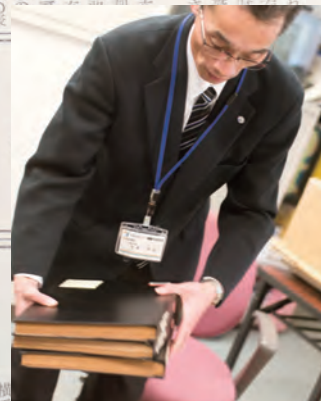
るのか、そろそろ足を出そう、自分で歩こう。自分の身を焼いて明かりを照らしたいまつ、そのたいまつに我々ひとりひとりになりたい。」といったことが、創刊の思いとして熱く書かれていて、仮にこの「東北」や「雪国」を「地方」と置き換えれば、それはまったくもっていま現在の僕たちの思いであるような気がしました。その地域の人自らがたいまつたるかどうか。いつのまにやら「田舎」は「地方」へ、「地方」は「ローカル」へと、言葉がスマートになっていくと同時に、地方PR誌や、地方自治体発のPR映像なども、オシャレでスマートなものが増えていますが、テクノロジの成果とデザインの成熟だけをもってクオリティが高いと認識される「ローカルメディア」の現状に、僕は少し疑問をもっていました。しかしいま僕ははつきりとその違和感の正体がわかったように思いました。

週刊たいまつ

その後僕たちは『週刊たいまつ』の原本を見せていただくべく荷物が届いたばかりの図書館へ。突然の訪問にもかかわらず、職員の佐藤さんが丁寧に対応してくださり、早速その現物を見せてもらえることに。



文化通信
1915年1月2日生まれのおのさんは現在101歳。1940年に朝日新聞に入社し、中国、東南アジア特派員となるも、終戦を機に戦争責任を感じ、退社。1948年からここの秋田県横手市にて『週刊たいまつ』を30年もの間出し続けられました。1号4ページのタブロイド紙が綺麗に製本されたそれらの束は、まさに秋田の地の地層そのもので、僕たちは時を忘れて『週刊たいまつ』を読みふけるのでした。



木村製粉製菓
団体旅行の相談はお気軽
横手市駅前・電話



たいまつ焼き

気付けば日も暮れかけていて、大慌てで図書館を出るのんびりチーム。イマブがラジオで聴いたという「たいまつ焼き」の会場へ向かおうと思うのですが、横手と言えば有名な、かまくらと違って、観光化されたお祭りではないため、ネットで調べるも、おおよその場所しかわかりません。このたいまつ焼き、江戸時代から300年以上続いている小正月行事で、上醍醐^{かみだいご}と金屋^{かなや}という二つの地区それぞれの田んぼに5本のたいまつが互いに向き合うように立てられ、五穀豊穡と無病息災を祈ってそれを一斉に燃やすのだそうです。そもそも上醍醐には刀鍛冶が、金屋（金矢）には弓職人がいて、同じ火の神様を奉り参拝しあったのがはじまりと言われているとのこと。いよいよ一目見てみたい！と思った僕たちは必死になってその場所を探します。

どんどん日が暮れていくなか、iPhoneのマップ画面とにらめっこしつつ、上醍醐地区をウロウロしていると、小さな消防車を発見。もしや？と思い、田んぼの方を見てみると、藁で組まれた大きなたいまつがう本立てられていました。あった！ようやく会場を発見して安堵するのんびりチー

ム。そこに立てかけられた案内札によると、こちら上醍醐のたいまつはろうそくの芯を表すように細長く、もう一方の金屋はろうそくの台を表すようにずんぐりとした形になっているとのこと。そしてこの行事、男性だけが参加でき、女性はたいまつはもちろん、作る藁に触れることも、焼き場に行くこともできないとのことでした。もちろんまわりに観光客らしき人は一人もおらず、怖々様子を窺っていたのんびり



チームですが、徐々に集まって来る集落の人たちが、明らかによそ者な僕たちのことを気にかけてくださり、いろいろとお話してくださいます。さらにお酒まで振る舞ってくださいまして、みなさんの優しさになんとか寒さを忘れまします。18時ちょうどに打ち上げられた花火を合図に、上醍醐も金屋も一斉にたいまつに火を灯します。そして僕たち男性陣は、集落のかたに案内されるままに、たいまつに近いまで行かせてもらいます。

のんびりメンバー全員での取材の最後を締めくくる、たいまつ焼き。時折激しくなりながら天高く燃え上がるたいまつを眺めながら僕は「自分の身を焼いて明かりを照らすたいまつ、そのたいまつに我々ひとりひとりがなりたいてい」というむのさんの言葉を頭の中で何度も何度も繰り返していました。そして、この数日後、念願叶ってお会いすることができた、むのさんは、まるでこのたいまつのように激しく熱いかたでした。本特集の最後に、むのさんの言葉を掲載させていただきます。思い返すほどに胸が熱くなるその言葉のの一つ一つをどうかしっかり目に焼き付けてください。

ありがとうございます。



むのたけじさん

101歳

藤本 むのさん今日はありがとうございます。実はこれ、僕たちが作っている『のんびり』という雑誌で、我々はその編集メンバーなんです。いくつか質問させていただければと思って来ました。

むのさん（以下敬称略） はい、はい。

藤本 『たいまつ』を横手で作ろうと思ったときの、一番最初の気持ちといえますか、衝動みたいなものは、どういうものだったんですか？

むの それは要するに、私はジャーナリストとして、農業問題と教育問題に、うんと力を入れてた。生活において食い物がなきゃ減じるわけで、だから農村が大事だと。それで、もう一回自分が出直すために、勉強をやるとなれば、農村の若者たちと力を合わせて、どういう世の中を自分たちが作りたいのか、それをお互いに勉強しながら、その勉強のプロセスを、活字にして仲間で配りながらね。そうして第一歩から、自分たちで自分たちの道を作る。そういうことしかないと思って、『たいまつ』をはじめたんです。自分自身がいま

つとなつて照らすのね。だから『たいまつ』なの。

藤本 当時、『たいまつ』以外にも、地域で新聞を作るっていう動きはありましたか？

むの ありました。秋田県でも、人口の多い町はたいてい新聞を出しよつたんですよ。そのなかで『たいまつ』は、私が新聞記者として戦争を経験して、そこでやるべきことをやれなかったという反省が根底にあるから、他の地域新聞とはちよつと違つたと思います。だけど、地域の中に根を下ろしてやるというのでは同じ。いま、そういう新聞、雑誌がまた増えてきたそうですね。

藤本 そうですね。

むの いままた全国あつちこつちで増えたのは何かって言うと、これがジャーナリズムの原点なの。秋田県の片田舎の最も隅っこでね。ちっぽけなね、資金も少し。でも、『たいまつ』に対してマッカーサー司令部の新聞係は、朝日、読売、毎日のような大新聞と同じに扱つていたの。そのとき接触した

アメリカ人は、「アメリカのニューヨークタイムズでも同じだ」と言った。人口が3千人になったときに住民が自分たちで金を出して定期刊行物を出したところから生まれた、と。『たいまつ』と同じだと言つてね。そういうふうにして、非常に小さな印刷物だけれども、ジャーナリズムの地域情報運動が、みんなそういうものだと言つて励ましてくれましたな。アメリカ人はね。

藤本 いまの時代だからこそまた、そういう地域の新聞やメディアが果たせることがあるんじゃないかと。

むの とにかくいまは、人々に声を出させる。『たいまつ』は、最初そういう声が出てこなかったから、こつちが聞きに行つてね、記事を書くようにしたときもあります。とにかく声をじゃんじゃん出させるの。次にその声を整理する。その中で実現させたいと思うことは、どうやつたらいいか。それを側面からね、ココンとノックしてやるのが、刊行物のやれることです。ある意味限界があるかもしれない。でもそれに応じて読者側が同時に発行者にもなれるの。読者と発行者の共同作業が大切な。大新聞社が、株式会社朝日新聞社、株式会社毎日新聞社だつていって、新聞を売つて儲けるでしょ。これでは仲間じゃないもの。だもんだから、軍部が恐れるような力を生めなかつたの。この格好のままじゃダメ。ところが地域新聞は、それにこだわらないもんね。なんでもやりたいように試してみる。

藤本 声をあげることと同じようにいろんな人たちが新聞を作つたりすることも……。

むの そうそう。最初はね、昭和23年に秋田県ではじめて、でも当時は声が来ないのよ。だから紙を持って行つて、「あなた、ここに言いたいこと書いて」つて。実際やつたこと。田んぼの野良道に座つて「じいさん、いま何言いたい？ 俺書く」つて。それで文章を直して「こういうのいいか？」つて。「あんたの名前、歳、書いてもいいか？」つて。許可得れば出す。嫌だつて言われれば出さない。そういう声を出すことさえもね、昭和20年代は、こつち側があたらないかならなかつた。いまは違いますよ。いまはもつと言いたがつて。

藤本 むのさんが、ずつと横手にいながら新聞を作つていて、そのなかで、俯瞰で世の中や日本を見たりつていうことができたつていうことが、ずつと地方にいる人たちにとっては希望なんじゃないかなと思うんです。

むの やつぱりあれですよ。勉強会をやつておつたんで。だから発行しながら仲間が2、3人できたら、やつぱり

勉強しなきゃダメだな。それが友だ。

仲間。それは一番ありがたいんだ。だから、あんたがたも新聞出しながら、仲間が何人か出てくるでしょ。結び合うようにして、お互いに勉強会やるのよ。

藤本 はい。

むの 秋田県の特徴は、開拓者であるほど強いんだよ。東海林太郎でも石井漠でも、ものごとを先頭に立つてやるんだ。ま、だからそういう運動が秋田には出てくるんだなと。……みなさんの作るのを聞いて、心惹かれておりました。だから何ができるだろうか、存分に頑張つておやんなさい。好きなように。

一同 はい。

藤本 今日お話を聞かせていただいて、やりたいという気持ちと、やらねばなという気持ち……。

むの 頑張ればいいじゃない。

藤本 今日の言葉を胸に、頑張りたいと思います。

むの 頑張つて。

藤本 ありがとうございます。

一同 ありがとうございます。

むの 頑張れ。頑張れ。





今回、秋田に来てくださったのは、堀部美奈子さん。対象をほかのものになぞらえて表現する「見立て」の文化を大切にしながら、現代の視点で和菓子を作ってこられました。2日間の秋田の旅ののち「ちょうどいいかんてん」を作っていただきます。

堀部美奈子

1981年生まれ。京都在住。和菓子作家「日菓」として2015年末まで活動。現在は、書店「誠光社」店番要員。また、和菓子屋さんを集めたイベント「甘党市」の実行委員としても活動中。



秋田の男子たちの内なる強さが、ここぞとばかり溢れ出す！「けんか梵天」とも呼ばれ、境内を激しくもみあいながら奉納する様子は圧巻でした。



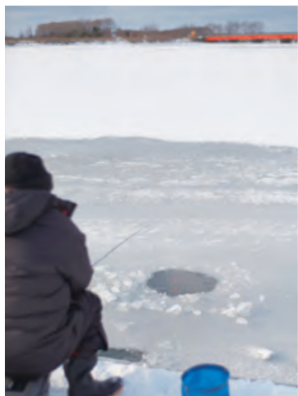
梵天に付いた、強い霊力があるという「三角守」をゲット！



はちろうがた
八郎潟へ。



編集部イチオシ、畠栄菓子舗の「あんごま餅」を購入。八郎潟を見ながら食べようと、湖畔へ向かいました。



八郎潟の湖面の氷はまだ薄い。岸には数人の釣り人が着膨れしたまんまるの体をさらに丸めて釣り糸を垂らしている。「釣れますか？」と声をかけると「見てだけのほうがいいよ」とお返事。バケツの中を覗くと4、5匹の小ささまざまなワカサギが驚いたように元気に泳いでいた。「天ぷらにして食べたいな」と誰からともなく声が漏れる。見渡す限りの白い世界。太陽が出ているため、ところどころ金色に光るが、空気はキンキンに冷たく、無言になると自分の息が聞こえそうなくらいしんとして音もない。すごく美しい。

1
日
目

たいへいざんみやし
太平山三吉神社
ぼんでんさい
梵天祭へ



毎年1月17日に行われる、梵天と呼ばれる依代を奉納し、五穀豊穡や家内安全・産業発展などを祈願する祭り。

ち
ょ
う
ど
い
い
かん
てん

第4回
堀部美奈子さん
と冬の秋田

Photo: 船橋陽馬

天使の寒天とは？ 秋田のお母さんたちは、何でも寒天で固めてしまいます。甘いものから、しょっぱいものまで、おもてなしの心で寒天を作り、さまざまなメニューを生み出しているお母さんたち。このように、寒天を使いこなす人たちは、誰もが「寒天使い」＝「寒天使」といえます。そんな寒天使たちが作った寒天を「天使の寒天」と呼んでいます。

最優秀寒天の「とうふ羊羹抹茶マーブル」をいただきながら、寒天談義。堀部さんの和菓子の本をお渡しすると、その造形やネーミングの着眼点に、藤倉さんも目から鱗の大感激!



2
日
目

藤倉節子さんに会いに。

第二回天使の寒天博覧会の優勝者、藤倉節子さんにお会いするため、横手市へ

地元産のりんごやがっこ（漬物）、横手焼きそばなどもふるまっていた、お腹いっぱい。



天使の寒天博覧会で審査員を務めてくださった、森谷康市杜氏のいらっしゃる浅舞酒造へ。「天の戸」が代表銘柄のこの蔵、仕込み真っ最中のところをお邪魔しました。

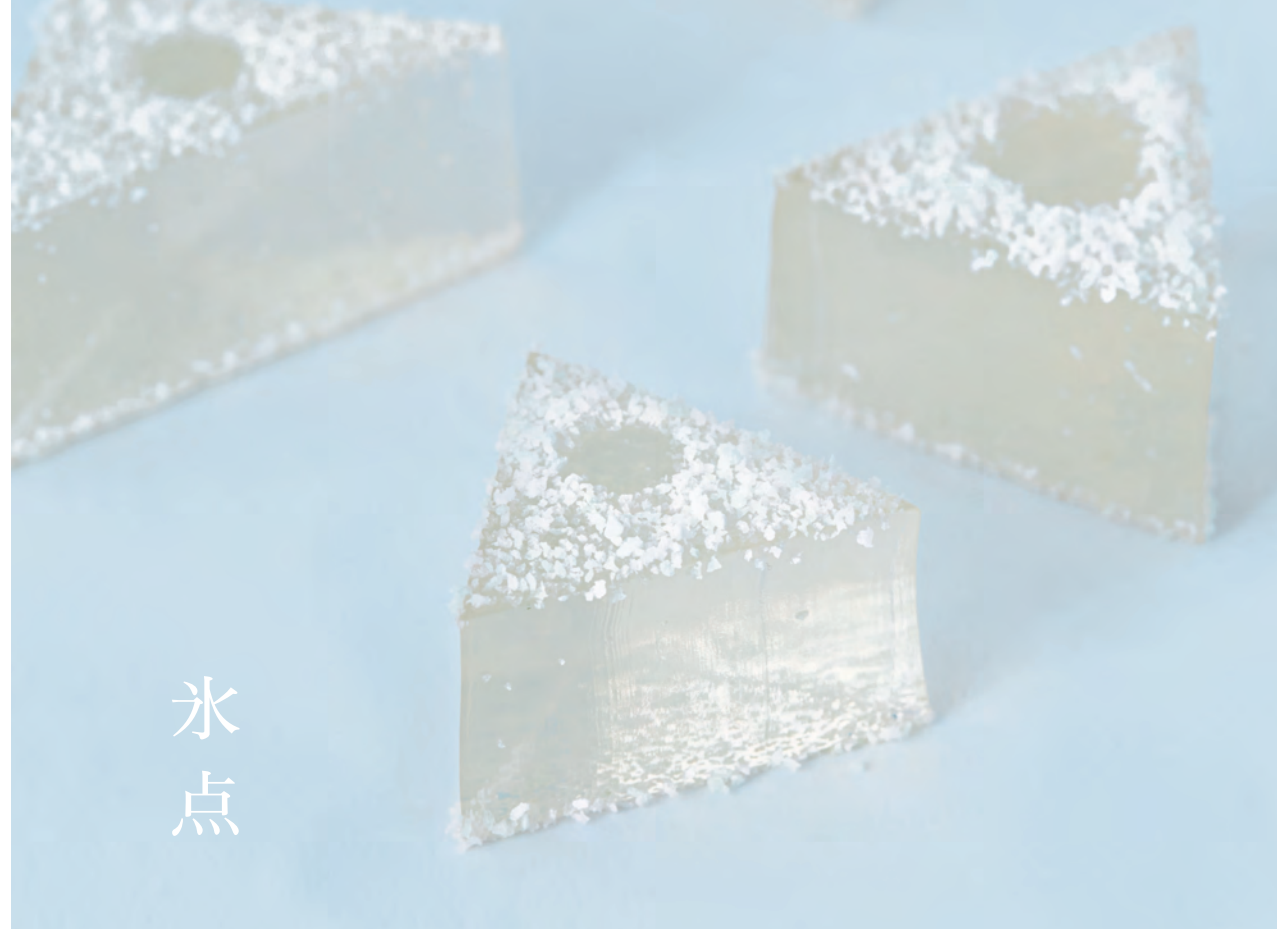
浅舞酒造へ



除雪車に削り取られた雪の壁が、藤倉さんの寒天の断面のようにきれいで美味しそうだ、そんなことを思いながら車は浅舞酒造に着いた。蔵の中はひんやりとしていたが、仕込みの順番を聞きながら逸る気持ちを抑えきれず体が温かくなってくる。麹の香りが、お酒は大好きだ。麹の香りを胸いっぱい吸い込みながら辺りを見回すと、整頓されて使い易そうな道具たち、リズムよく作業をこなす従業員さん。自分たちで工夫した道具や場所は愛着がわき、気持ちよく働ける場所。出来上がる酒も気持ちよく酔える旨いものに決まっている。覗いた樽の中では、酒の泡が心地良さそうに歌いながら生きていた。



氷
点



棒寒天 —— 2本（15～16g）

砂糖 —— 上白糖 350g、グラニュー糖 350g

水 —— 1000ml

干し餅（白） —— 4個分

準備

・棒寒天を一晩、たっぷりの水に浸けて戻しておく。
・干し餅をすり鉢や綿棒などを使って細かく砕いておく。

・丸い型紙を作る。大きさは好みで。

写真は1センチくらいのものを用意。

- 鍋に、水を絞った棒寒天、分量の水を入れて強火にかける。
- 寒天が溶けたら砂糖を加え、溶けたら目の細かいザルなどで濾し、溶け残りを除く。
- 濾した寒天液を鍋に戻し強火にかけ、ヘラですくってトロッとゆっくり落ちるくらいまで煮詰める（102～103℃くらい）。
- 火を止めて、型に流して粗熱をとり、冷やし固める。固まったら型から外し、三角にカットする。
- 上にくる部分に丸の型紙をあて、上から干し餅をふりかける。底面にも干し餅をつけて、まんべんなく付いたら、型紙を外して整える。



和菓子の世界には氷の碎片を三角で表現することがあります。干し餅を碎き、表面と底面につけました。表面にはワカサギ釣りで誰かがあけた穴の跡を残しました。人が去ったあと、湖面はまたすぐに凍り出し、穴は塞がれ始めています。釣れたか否か、想像を膨らませます。底面に付けた干し餅はお皿や懷紙に盛った時に、くっつかないようにということだったのですが、思わぬ発見で、干し餅が透明の寒天にキラキラと反射してとてもきれいに仕上がりました。



「ぼくの白い馬」1979年

詩 修

詩人が描く 池田修三の言葉

池田修三の版画に寄せた、
詩人たちの書き下ろし作品

11

岩崎 航

きつと、あなたに
白馬の王子さまは
来ないよ
だってこの馬
あなたが乗るんだから
乗れるわけないって
誰が言ったの？
人にどう思われたって
ボクの白馬だ！
決めたのなら自在だよ

ぼくが心のなかで
何を思おうが
自在さ
千里を旅する
馬にだって乗れるんだ

自在（五行歌三篇）

岩崎 航（いわさき わたる） 1976年、仙台市生まれ。詩人。筋ジストロフィーのため、経管栄養と人工呼吸器を使い暮らしている。2004年から五行歌形式での詩を書く。詩集『点滴ボール 生き抜くという旗印』、エッセイ集『日付の大きいカレンダー』（共にナナロク社）を刊行。近年は谷川俊太郎、末井昭との対談など、執筆以外にも活動を広げる。

池田修三 1922年秋田県にかほ市象潟町生まれ。版画家。秋田県内の高等学校美術科教諭を退職後、1955年に上京し版画に専念する。主テーマは子どもたちの情景で、晩年は風景画も手がける。作品は企業カレンダーや銀行の通帳、「広報きさかた」の表紙などにも使われる。2004年82歳で死去。

酒 の 泡



棒寒天 —— 2本（15～16g）
砂糖 —— 上白糖 350g、グラニュー糖 350g
水 —— 1000ml
道明寺粉 —— 100g
水 —— 120ml

準 備

- 棒寒天を一晩、たっぷりの水に浸けて戻しておく。
- アルミホイルをクシャクシャにしたものを広げ、流し型の底に敷き、テープで止める。（テープで止めないと、寒天の中で浮き上がってしまうので注意）
- アルミ缶を使って、丸の抜き型を作る。丸の抜き型があればそれを使用してもいい。



- 鍋に120mlの水を入れ沸騰させる。沸騰したら火を止め、道明寺粉を入れて蓋をして蒸らし、道明寺粉が指で潰れるくらいになったらザルにあげ、水気を切っておく（しばらくしてもまだ固かったら、軽く煮て柔らかくする）。
- 鍋に、水を絞った棒寒天、分量の水を入れて強火にかける。
- 寒天が溶けたら砂糖を加え、溶けたら目の細かいザルなどで濾し、溶け残りを除く。
- 濾した寒天液を鍋に戻し強火にかけ、ヘラですくってトロッとゆっくり落ちるくらいまで煮詰める（102～103℃くらい）。
- 火を止めて、水をはった大きいボウルに鍋ごと浸けて粗熱を取り、とろりとしてきたら、ザルにあげていた道明寺粉を加えてヘラで混ぜる。
- しっかり粗熱をとり、流し型に流し（道明寺粉が沈んでもいい）、冷やし固める。固まったら四隅に包丁を入れて、ひっくり返して取り出す。抜き型で抜いて、完成。

“水の泡”という言葉が、はかなく消えやすいものの例えだとしたら、“酒の泡”は、はかなく消えてからが楽しみなものの例えになるのでは、と思い造語にしました。人は手間暇をかけてこの泡のその後を楽しみに待つのです。寒天の中に、道明寺粉を入れて固めました。冷やし固めたあと、流し型をひっくり返して取り出し、丸の抜き型で抜くと、沈んだ道明寺粉が上になって、樽の中の泡のイメージが思った以上に表現できました。

ハタハタきたぞー！

初冬の秋田に雷が鳴り響くと、県民たちの目は輝きます。毎年11月末から12月中旬、荒れた天候が続くころ、ハタハタが産卵のために秋田県沿岸に押し寄せるのです。秋田の県魚でもあるハタハタ。漢字では魚偏に雷、または神で「鰐」「鰐」などと書き、雷の神様「霹靂神」がその名の由来ともされています。秋田に、この神様の魚がやってくると、お祭り騒ぎが始まります。

取材：文＝矢吹史子 写真＝高橋希
Text: Fumiko Yabuki Photo: Nozomi Takahashi

11月29日。男鹿市北浦漁港では、ハタハタの初漁を迎えました。この時期に獲れるものを「季節ハタハタ」と呼び、初日のこの日は、網を仕掛けるために17艘の船が一斉に港を出ました。数時間後、網をしかけ終えた「さち丸」の松山静夫さんに、お話を伺いました。



さち丸 親方
松山静夫さん

今（昼）網かげだものは、また夜に海に出動して、魚がかがってれば、2時間ぐらいかけて引き揚げる。船が埋まるだけ積んでくるんだ。そして、揚がってきた中から、商品になるものをみんなて選別する。家族と、手伝いの人だちど7、8人ぐらいでな。みんな手間なの。でも選別してるときは、おばちゃんのだ話聞いてるだけで、おもしろいよ。噂話だの、エロ話だの、すばらしいよ。オレなんか、70過ぎのばあさんさ誘惑されるんだや（笑）。この仕事は夜がメイン。魚も人間も、産卵どがそういうのは夜だすべ（笑）。ここから毎日、同じことの繰り返し。12月、クリスマスあたりまでだ。

ハタ漁やって20年近くになるけども、始めの当時、船は29艘だった。もっと昔は49艘もいんだけどな。だんだん獲れねくなってきたり、歳取ったりして、減って減って、今年は17艘。海の広さは変わらねんだけどな、魚は尻下がり。ここ7、8年で急激に落ちた。買う人は安い方がいいんだもの。獲る人は高く売りたいしな。第一次産業のつらいところで、自分の獲ったものさ値段付けられねえものな。農家の人もそうなんだろうけども。でも、この船が一番若げえ。船員5人いるけども、若げのは23、24歳のものな。それでもベテランだ。もう16歳から乗ってるもの。でもこれから獲れねえなればな……。いずれそういうどきが来るべ。



おもしろえ商売なんけどもな。沖さ行つて、狙ったところに魚いて「ほらほらほら！」っていうときは、あど、金のごと忘れてな。傍から見ればみんな同じどころに網かげてるように見えるかもしれないけど、ところがどっこい、全然違う。それがハタハタのおもしろいところだ。ハタハタはやっばり、みんな夢中になるもんな。人間変わる。海が湧くよな。このへんの人がだはみんな、アドレナリンがババっと出るんだ。祭りだな。





いがったな！揚がつて！
ハタハタの時期は20日ぐらいたから、
始まったかと思えば、もう終わり。
あつという間ですよ！

おいだいだいだ！
いいおどご（オス）も、
いいおなご（メス）も
いだな！

全部選別するつてば2時間ぐらいかかる。
これやってるうちにまた船が出て、また魚運んできて、
また選別。みんなでお話してれば楽しいよ。
「今夜は寝かさないぜー！」って笑いながら、
徹夜で朝までやることもあるよ。

毎年ワクワク
してるよー！
獲れるが、獲れないがつてね。



ハタハタ漁が続く12月。再び、さち丸
のみなさんを訪ねると、選別作業の真っ
最中。ハタハタは、ブリコと呼ばれる
卵が入っているメスが重宝され、高値
がつくため、獲れたものを一つ一つ選
別するのです。作業現場は、水揚げさ
れたばかりの大量のハタハタと選別
チームの笑い声で活気に溢れています。

ハタハタ大好き！
朝、昼、晩、三度三度でもいい！
おつゆ（汁物）に入れるのが一番！
しょつたる味（ハタハタの魚醬）どが、
しょうゆ味どがね。
唐揚げも美味しいよ！

選別してるのは、
みんな近所の人だち。
年に一回、
ここで会うのが
行事みたいなものだね。



こつちはメス、
こつちはオス。
ほれ、これはババ。
ブリコ出だやづ（産卵を終えたもの）は
「ババ」っていうの。
こつちはイケメン（立派なオス）な。
こうやって分けるの。やってみれ！

去年まで私の主人が
さち丸の親方だったの。
ハタハタ終わって
死んじゃったのね。
だから今は息子が後継いで
親方やってるの。
でもまだ23歳。若いから、今は静夫さんと
一緒に親方やってるの。心配だったよ！最初は。
だんだんね、親方らしくは
なってきたのかもしれないけど。



さち丸の選別チームのなかの一人、工藤幸子さんが、地元の公民館で、仲間たちと「ハタハタ寿司」（ハタハタを鮓や野菜で漬けた飯寿司）を作っていると聞き、お邪魔してきました。



ハタハタうじ！

工藤幸子さん



来月「ハタハタ寿司グランプリ」を開催しようと思つて、そのために今日は作ってるんですよ。私が考えて、今年初めてやるんだけどね。いろんな人がいろんな漬け方で作ってるけど、たぶん、お母さんがたはさ、自分のが一番美味しいと思つてるでしょ？ それを教えてほしいじゃん。

私は、大阪生まれの奈良育ち。主人の実家が男鹿でね。でも、もうここが一番長いよ。20年経ったからね。毎年毎年、選別に呼んでもらったり、寿司の作り方を教わったりして、だんだんこの土地の人になっていくんだね。つくづく笑われるけどね、「ここで生まれた人よりもこの人らしい」って（笑）。自分はよそ者だなんて全然思つたこともない。すっかり秋田弁もネイティブでしょ？ 先生がいいから。まさに先生がいい。先生がいて、めんこがつくれるから。男鹿の人たち、私は好きです。でもハタハタがなかったら、ここまで馴染めなかったかもしれないですね。

ハタハタって、関西では食べたことがなかったのね。だから「こんなに美味しい魚があったの!」って思つたよ。今は時期がくれば「まず、ハタハタだけ食べ」って（笑）。焼いて、煮て、ご飯はいらない。1人5匹くらいずつはふつうに食べるから、いっぺんに消費される。ハタハタで腹つえぐ（腹いっぱいにするの。つめにも入れるでしょ、さつと茹でただけでも美味しいし、酒蒸しにしたりね。南蛮漬けもいいよ）。

毎年12月になれば、クリスマスよりハタハタだし。「ハタハタ寿司漬けねえば、正月来ねえ」ってな。山のほうの人はハタハタがないから、買うのも必

死だしね。北浦の漁港の周りなんか渋滞してさ。今の時期だけだよ。そして、みんな決まって、自分が食べるついでより仲間に配らないと気が済まないんだよね。何キロも箱買ひして。もう祭りだよ。今朝も近所の母さん「今やらねえで、いづやるって!」って言いながら寿司作つてだよ（笑）。来る日も来る日もハタハタよ。

男鹿って、ハタハタとか山菜なんかもそうだけど、作ってるものより天然のものが多くて、だから枯渇するものもあるんだけど、でもそれでいんじゃないの？ っと思うのね。季節のものだから。でも、そうすると心待ちにするじゃないですか。ああ、またこの時期が来たな。だからこそ、今食べないといけないし、今食べたら次はないよって。そっちのほうがこらしいって思う。

昔はね、「なぐに、いまにハタハタくるもの」って、ハタハタがくればお金が大量に入るからうろたえなくてもいいっていうのがあったけど、もうそういう時代じゃない。さち丸のチームも、今は異常なテンションだけど、10年後はどうなってるか……厳しいよね。

いまは、都会並みの食材がどこでも豊富に手に入るから、その土地ならではの食材が並ばないお家もいっぱいあってね。核家族だとどうしてもそう



なっちゃうよね。でも、田舎で育った人は、味噌の味、出汁の味、魚の味……が知らず知らずのうちに馴染まれて、小さいころから微妙な味の差っていうのがわかる子どもになると思うんですよ。高価なものじゃなくても、旬のものが美味しい。そういうのに気付けるのって幸せなことだし。

だからこそ、ほんとにみんなにハタハタを食べてもらいたい。食べる人がいない限り売れなくて、結局、その繰り返しだから。今度のグランプリもそのきっかけで、そういう小さなところから、繋がってもらえたらなって思っています。

航空

東京(羽田)⇄秋田 ANA/JAL … 約65分
大阪(伊丹)⇄秋田 ANA/JAL … 約80分
札幌(新千歳)⇄秋田 ANA/JAL … 約55分
名古屋(中部国際)⇄秋田 ANA … 約80分

【リムジンバス】秋田空港～秋田駅西口(約35分)

東京(羽田)⇄大館能代 ANA … 約70分

【リムジンバス】大館能代空港～大館市内(約55分)

大館能代空港～北秋田市(鷹巣)(約15分)

〈ANA〉0570-029-222 〈JAL〉0570-025-071

藤本流 のんびりフェリーの旅

広い秋田を存分に楽しみたい僕は、フェリーを使って車ごと秋田入りすることもしばしば。敦賀発秋田経由のフェリーは便数が少ないのが難点だけど、青い空と青い海に挟まれながらの、のんびり移動は最高の幸福!

フェリー 新日本海フェリー

北行 敦賀(10:00)⇄新潟(22:30)⇄
秋田(翌5:50)⇄苫小牧東(17:20)

南行 苫小牧東(19:30)⇄
秋田(翌7:45)⇄
新潟(15:30)⇄敦賀(翌5:30)

●秋田港から秋田市街へは車で約30分。
(秋田中央交通バスのご利用も可能)

〈秋田フェリーターミナル〉
018-880-2600

運航スケジュールは必ずお問合せください。

高速バス

仙台⇄秋田 … 3時間35分(仙秋号)

東京⇄秋田 … 8時間30分(フローラ号) 深夜バス

横浜⇄秋田 … 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号) 深夜バス

〈秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)〉018-823-4890

〈JRバス東北秋田支店(ドリーム秋田・横浜号)〉018-862-9461

※秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。

秋田新幹線 こまち

仙台⇄秋田

最速2時間5分

大宮⇄田沢湖

最速2時間21分

東京⇄秋田

最速3時間37分

〈JR東日本テレフォンセンター〉
050-2016-1600

福田流 のんびり新幹線の旅

自動車

仙台⇄秋田 … 約3時間30分

東京⇄秋田 … 約7時間30分

〈日本道路交通情報センター(秋田センター)〉

050-3369-6605

non-biri akita access map

男鹿市

北浦漁港 (P56～)

毎年11月下旬～12月中旬頃に
ハタハタ漁が行われます。

【自動車】

秋田駅

| (10分)

秋田中央IC

| (15分)

昭和男鹿半島IC

| 国道101号(45分)

北浦漁港

秋田市

秋田県立図書館 (P13)

県内で発行された新聞や出版物などの
ローカルメディアが集まっています。

秋田市山王新町14-31

TEL 018-866-8400

【自動車】

秋田駅

| (10分)

秋田県立図書館

【バス】

秋田駅西口
バスターミナル

| (10分)

バス停「県立体育館前」

| 徒歩(1分)

秋田県立図書館

みよし 太平山三吉神社総本宮 (P47)

【三吉梵天祭】

毎年1月17日に開催されます。

秋田市広面字赤沼3-2

TEL 018-834-3443

【自動車】

秋田駅

| (10分)

太平山三吉神社

【バス】

秋田駅西口 バスターミナル

| (10分)

バス停「三吉神社入口」

| 徒歩(2分)

太平山三吉神社



『のんびり』をお読みいただきありがとうございました。
アンケートにご協力ください。

『のんびり』は人を基軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後とりあげてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。抽選で『のんびり』オリジナルプレゼントをお贈りいたします。応募〆切は2016年4月30日(土)。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

※個人情報プレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の利用はいたしません。

PRESENT No.1

『のんびり』15号セット



3
名様

これまで発行された『のんびり』1～15号までを一挙大放し！

PRESENT No.2

ハタハタ寿司



2
名様

p56で紹介した、秋田の県魚ハタハタを、麴、野菜、海藻などで漬けた飯寿司「ハタハタ寿司」。

のんびり公式ウェブサイト <http://non-biri.net>

ハガキでご応募の場合

- ① 郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス
 - ② 本誌の入手先
 - ③ 今後とりあげてほしい話題
 - ④ 今号でおもしろかった記事(複数回答可)
 - ⑤ ご感想
 - ⑥ 希望のプレゼント
- 以上をハガキに明記の上、ご応募ください。

宛先 〒010-0021 秋田市栢山登町7-14 のんびり合同会社 のんびり編集部



のんびり

16

2016.Spring

2016年3月22日発行

STAFF

編集長
藤本智士 (Re:S)

編集
矢吹史子
田宮 慎
今井春佳
山口はるか (Re:S)

アートディレクション & デザイン
堀口 努 (underson)

デザイン
澁谷和之 (澁谷デザイン事務所)

写真
浅田政志
鍵岡龍門
船橋陽馬
高橋 希 (オジモンカメラ)

題字・イラストレーション
スタタカミツ

似顔絵
田渕志織

大道具
大谷 心

動画
近藤康洋 (mel digital co.,ltd)
佐藤 努 (mel digital co.,ltd)

発行
秋田県
観光文化スポーツ部観光戦略課あきたびじょん室
Tel : 018-860-1073

編集
のんびり合同会社 のんびり編集部
〒010-0021 秋田市栢山登町7-14
Tel : 018-832-8086
Fax : 018-803-4503
Mail : info@non-biri-go-do.jp

印刷・製本
秋田活版印刷株式会社

* 乱丁・落丁誌はお取り替えいたします。
* 本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
* 本誌データは2016年2月12日現在の情報です。
あらかじめご了承ください。
* 本誌は「あきたびじょん」マガジン等企画制作業務委託業務で制作いたしました。
© nonbiri all rights reserved.